

外交史補足資料選

清沢湧著 『日本外交史』 補充・引証資料集

『中央公論』『東洋經濟新報』『同盟旬報』『國際月報』

から

凡例

本 pdf は、清澤渕著『日本外交史』関連資料のうち、清沢本人の雑誌掲載記事および引証とされた雑誌記事のいくつかを収録したものである。

漢字は、新漢字のあるものは改めたが、いくつか JIS 第二水準までになく第三、四水準の字形を使っている。旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。ただし、史料の引用に於ては一部改めたが、旧仮名遣いを残している。また一部、文語体を口語体に改めた。

「洲」と「州」が使い分けされ、当時は「満洲」が基本であったが、すべて「州」に改めた。「ケ年」などの「ケ」は「ヶ」に改めた。

ルビは作成者が、多くの方にとって目を通し易いようにと付けたものである。（主にデジタル版大辞林で確認した）

カタカナの地名・人名表記で、一部現代表記に替えた。

参考文献において巻号などに使われるローマ数字はアルファベット「A」で代用している。

参考文献で、**青字斜体**で記したものは、ネット上に公開されているものです。

【**■** 及び「**■**」は作成者の追加したものである。頁端の脚注も作成者によるものである。

その他細かな誤植は注記していない。逆に、おかしい字があるとすれば、それは本作成者のミスと判断されたい。

目次

『中央公論』

内田外相に問う

清沢洌

『日本外交史』第5篇第2章 註五五

松岡全權に与う

清沢洌

『日本外交史』第5篇第2章 註五五

幣原喜重郎男随談録

無署名

『日本外交史』第3篇第3章 註四〇

日米関係変遷史

清沢洌

『日本外交史』第3篇第3章 註七五

『東洋経済新報』

支那事変と列強の動向

1939.2.4

清沢洌

自主外交とは何ぞ

1939.9.9

清沢洌

米国は斯くして参戦した

1941.2.8

清沢洌

対豪外交の重要性

1941.2.22 無署名論文

『日本外交史』第6篇第1章 註二五

開戦一ヶ月の経過から見た独ソ戦の今後

1941.8.2 『日本外交史』第6篇第3章 註九

注目すべき独ソ戦の帰趨

1941.8.16 無署名論文 『日本外交史』第6篇第3章 註九

『国際月報』

支那外交部発表

『同盟旬報』

1	1940.7 中旬号	第4卷20号21頁	『日本外交史』第6篇第1章 註四
2	1940.8 上旬号	第4卷22号33頁	『日本外交史』第6篇第1章 註六、註一三
3	1941.2 上旬号	第5卷 4号 112頁	『日本外交史』第6篇第1章 註二四
4	1941.7 上旬号	第5卷19号29頁	『日本外交史』第6篇第2章 註八
5	1941.7 中旬号	第5卷20号19頁	『日本外交史』第6篇第2章 註一四
6	1941.7 中旬号	第5卷20号20頁	『日本外交史』第6篇第2章 註一一
7	1941.8 上旬号	第5卷22号81頁	『日本外交史』第6篇第2章 註一六
8	1941.7 下旬号	第5卷21号86.7頁	『日本外交史』第6篇第2章 註一九
9	1941.8 上旬号	第5卷24号76.7頁	『日本外交史』第6篇第2章 註二六
10	1940.7 上旬号	第4卷19号121頁	『日本外交史』第6篇第2章 註三三
11	1941.9 上旬号	第5卷25号29.30頁	『日本外交史』第6篇第3章 註五
12	1941.5 上旬号	第5卷13号89頁	『日本外交史』第6篇第3章 註二八
13	1941.9 下旬号	第5卷27号86頁	『日本外交史』第6篇第3章 註三〇
14	1941.12 上旬号	第5卷34号9頁	『日本外交史』第6篇第3章 註四一、四二
15	1941.11 下旬号	第5卷33号102頁	『日本外交史』第6篇第3章 註五一

——内田外相に問う——

内田康哉^{いけだ けんがい} 1865-1936

熊本県出身、帝国大学法科大学卒業、外務省政務局長、駐清公使、駐オーストリア、駐米各大使、1911年第2次西園寺内閣で外務大臣、のち原、高橋、加藤内閣で続けて外務大臣、1931年満州鉄道総裁、1932年齋藤実内閣で外務大臣。

『日本外交史』から、

第四篇第一章第八節「西比利亜出兵と西原借款」、英仏米がソヴィエト・ロシアへの干渉を止めたに對して、「日本は却つて増兵を試み、単独で駐兵することになった。外相内田の説明によれば、西比利亜は赤化し、政情不安となり、その危害が朝鮮の上に及ぶのを防止するといふのであつた。何時の間にか出兵の目的は変更されたわけである。」

第九節「パリ講和會議と日本」、第一次世界大戰の講和會議日本全權首席は西園寺公望であるが、實質的には牧野伸顯が務めた。当時総理大臣は原敬、外務大臣は内田康哉であつた。

第四篇第三章第一節「幣原外交の特徴」、幣原外相は一定の方針の下、兵を動かすことを極力避けた。「こうした方針は単に幣原外相時代のものに限らなかつた。後には所謂焦土外交を説いた外相内田康

哉も、幣原の前任者として協調政策に出た。ここにも時代の波を見るべきである。」

第四篇第三章第五節「ロンドン海軍協定成立」、世界大戦後の国際協調時代、「日本は枢密顧問官内田康哉を派して、昭和三年八月廿七日にパリに於て署名せしめた。不戦条約、パリ平和協定乃至はケロッグ協定といわれるものがこれである。」

第五篇第二章第七節「リットン報告書を繞つて」、関東軍將校による満鉄爆破に始まる満州事変時に満鉄総裁であつた内田康哉は「第五回目の外相に任命されたが、急命に接して帰京したのは七月七日のことであつた。かれは誰よりも現地の空氣を満喫して一切妥協的志向を持たなかつた。要談不調に【リットン】調査団は失望して北平に去り、一ヶ月余りの日子を費して九月四日報告を完成し、十月二日にジュネーヴで發表された。」

第五篇第二章第九節「四十二票対一票」、昭和八（1933）年二月、「當時、日本政府においては二月初旬までも、聯盟脱退を必ずしも最善の策とせずというに傾き、二月十九日に齋藤首相が興津に元老西園寺公望を訪問した時にも政府の態度は決定していなかつた。しかし事態は中途半端でやむものでないことを見透して、内田外相、荒木陸相、大角海相の如きは二月中旬に既に聯盟脱退を決意したのであつた。」

「#以下の論文は、『非常日本への直言』に収録され、「内田外相に与ふ」と改題され、各節に雑誌掲載時に無かった標題が附加された。標題を付し、**□**に『非常日本への直言』との異同を記す。」

内田外相に問う 『中央公論』1933.3号

清沢 洌

一 乗り合わせた船客

内田外相足下。

私はあなたの外交、従つてあなたに対して甚大な不満と懸念を有するものなのです。今までわれ等は、事外交に関するが故に、そしてわが国が重大なる国際的岐路に立つが故に、出来るだけ力を一にして、この難局を切りぬけることに努めて来た。時にあなたの政策に対して雲のような疑惑が湧いたことがあつたけれども、その時にさえわれ等は時局の重大さに鑑みて、好意ある沈黙を守つて今に到つたのです。

しかしながら差し迫まる国家の安危と、われ等の良心は、これ以上にわれ等をして沈黙することを許さない。国家は船、われ等は乗り合せた船客である。怒濤にもまれる船の運命を氣遣う点において、船橋に立つあなたと、船底の一隅にあるわれ等と何等の相違があるものではない。況

んやわれ等の沈黙は、却つてあなたをして止まるところなく船の方向を謬まらしめる恐れあるおやです。

あなたが満鉄総裁を辞して、江戸入りをされた時に【時、】私は外国にあつた。従つて非常時内閣の外相に就任されるまでの経緯については、多く知る由はなかつたけれども、あなたを歓迎する嵐のような国民の声は、洋を越えて海外にも伝えられた。従来、失礼ながら外相としてそれ程人氣があると思わなかつた貴方が、なぜ急に不世出の外交官のように囃もてはやされるかについては、後でも説くようにわが国の国民性に考えて、多少の不安はありましたが、しかし広大なる君恩に生きて来た貴方が、恐らくは最後の御奉公として台閣に立つからには、一死奉国の誠意を以て難局に処するであらうことを信じて、ひそかに期するところ多かつたのです。

然るにその後、貴方の外交を観ると、われ等にとつては失望以外の何物でもなかつた。もし幣原外交が退嬰外交であるならば、内田外交は××外交であり、××外交である。あなたの身上は、短見なる輿論を背景にして首を横に振るだけの芸当しかないと思われるほど否定に終始している。あなたはソヴェート・ロシアに対して首を振つた。あなたは又英国の妥協案に対して首を振つた。無論、あなたは国際聯盟に対して首を横に振り通している。

なる程、国民の輿論は貴方を支持して居り、あなたは尚人氣の中心にある。しかし私がこの書

をあなたに呈する所以は、あなたが人気のあることそれ自身が、国家百年のために憂慮にたえないからなのです。国内において外相とその外交政策が人気があることと、世界において日本が人気あることは全く別です。否、事實はそれと正反対であることは、誰に分らなくても外相の任にある貴方には分つていねばならぬ。

もし貴方が真ほんとに国を愛するならば——それを誰か疑いましょう——所謂国論に抗しても、不人気なる政策を行つて、知己を十年「——然り、一〇年で充分で長きを要しない——」の後に求める意志はないか。これについてあなたの切実なる熟慮を求めることが、この書の目的なのです。

二 内田外交の欠点

内田外相足下。

内田外交は今なお進行中であり、これに最後のな判断を下すことは、元より差控えねばならぬが、あなたの外交を通して根本的な謬りやうりは、余りに断定的であり、余りに固着的であり、また常に最後の死線を国民に約束してしまうことであります。

あなたは議會において、就任そうとう匆忙、焦土となつても国権を守ると云われました。焦土となつても国を守るのは軍人の領分であつて、あなたとしては身を賭しても、そうした事態を持ち来たら

しめないことを、その職能とせねばならぬと思うが、それをここでは申しあげますまい。あなたは又、リットン委員会が北京にあつて、その報告書を起草中に満州国を承認してしまつた。それは正に絶對的な背水の陣を布くものであつて、日本の外交的地位を針づけにしたものであつた。

死線をここにおいて、その後貴方はただ頑張り通した。『一歩も引かない』とか、『最少限度の要求』とか、およそ外交辞書に發見出来る強硬文字で、あなたの口を借りないものは一つもないといつてよかつた。そしてその時々新聞は日本の正義と、あなたの決意を喝采したのでした。

しかし私はその頃から一つの疑いを持つていた。私の諒解する外交というものには、二つの禁制があります。一つは『斷じて』とか、『常に』とかという斷定的な言葉を使わないことであり、第二は決して結果を急がないことである。この二つの禁制に背いた外交は、過去において、長い眼でみると屹度失敗しています。これが外交というものが劇的でない理由であり、また健全なる外交が国民の喝采を受けない理由でもあるのです。かのスチムソン外交が、その發表當時に欧米において頗ぶる評判がよく、しかも實際は米國をぬきさしならぬ地位に陥れたのは、このかれの斷言外交の結果である。

しかもスチムソン外交を攻撃したあなたは、それよりも何倍も強い言葉を以て、世界に大きな見得を切つていられるのです。スチムソンは、啻、米國の傳統的國策たる門戶開放主義を聲明した

に止まるけれども、あなたはその主義を守るに国家を焦土に化するも辞せずといつて居られるのである。世界始まつて以来、かくの如く大胆なる声明を外交開始当初になした外交官が他にあるか。

これもいいとします。しかし貴方が陥られた第二の過失はジエネバ【ジュネーブのこと】の聯盟會議に松岡洋右氏を送られたことです。こう云うと世間は必らず私の言の奇なるを批難されるであります。松岡全権の奮闘は何人もこれを疑わないではないか、松岡を抜擢したことを難ずるは何事ぞと。然り、松岡全権は奮闘しました。しかしながら現在の國際的状況から見て日本は、果して松岡氏の活動を利益としたであらうか。

考えて見て下さい。日本は満州における自衛的行動から、世界から無類の侵略国のように見られていた時です。その上に内田外相が焦土外交を叫んでいたのです。この時に日本が世界の舞台であるジエネバでなすべき外交は、円満無礙びんめいの外交——即ち平和的空氣を示す外交であるべくして、××として炸裂する強硬外交であつてはならぬ筈です。日本が世界から侵略国の汚名を受けていればいるだけ、せめてその外交は臆病なほど平和的でなければならぬ。それが日本を窮地から救い、世界の諒解と同情を集める所以である。然るに松岡全権の活動は却つて、日本の強硬なる方面を世界に広告したことになりはしなかったか。私は松岡氏の代りに石井子でも出したら

国民は不満だったろうが、結果はよかつたのではないかとも思うのです。

三 ジエネバの外交戦術

内田外相足下。

私は筆が松岡氏に及んで、小さいながら公人として立つ身の苦痛を感じます。松岡氏はわれ等には先輩であり、公私共に敬意を払っている【ドイツ私い、恩義も受けている】人である。しかし公事を議する場合にわれ等は総ての私情を犠牲にせねばならぬ。私は大度なる松岡君が笑つて自己に対する批判に耳を傾けられると思う。

私は元より松岡氏が語学の点において、その頭脳の点において、日本が持ちうる最上の人物であることを疑いません。従つて世界的には松岡氏の演説が頗ぶる少なく紹介され、支那人のそれが多く紹介された事実——日本で受くる印象とは反対に——或は、また英国の新聞紙が『ドイツ顧維均氏の演説は松岡氏のものよりも品位あり、より効果的であつた、松岡氏は日本の立場を表現するのに余り大した実力を示さなかつたことを白状せねばならぬ』(一)と云つたのは、日本の立場が然らしめたか、然らずんば偏見の結果の言葉だと思ふのです。

私の指摘したいのは、結局貴方の責任であるところの対聯盟戦術が、頗る拙劣であつたこと

です。私はここでは法理的方面——例えば始め日本が日支紛争について認める限度が聯盟規約第十一条であつて、第十五条を適用することについては反対して来たに拘わらず、いつの間にかその第十五条の中に這入つて戦つてゐるというような矛盾についてはこれを述べますまい。しかしながらここで如何しても明らかにしなければならぬのは、あなたの命令によつてなした日本全権の外交方法です。

日本全権はあなたの焦土外交の感化を受けて、常に背水の陣をしました。そして如何なる場合にも、まず持ち出したのはオブストラクション【Obstruction 妨害】の手であつた。たとえば昨年十一月二十四日の理事会にリットン委員会を列席発言せしむべきや否やについて、猛烈な抗議を試みた。われに正しき立場あり、リットン委員会の列席が何故それほどな抗議に値しますか。しかも日本全権は二日に亘つてこれと戦ひ、最後には『もしリットン委員に質問を許すならば、予は各委員に質問を開始し一週間或は一ヶ月に亘らん』とまで云つた。議会と異なり、会期なき理事会にこの質問戦の延長が何で威嚇の種になりましょうぞ。だから西班牙代表は『幾らでもやるがいいではないか』と逆襲したのである。

また英国の新聞紙も『委員会の諮問を妨害しようとする日本全権の戦術は重大なる誤謬であつた。彼の行動は理事会を刺激して、少しも事態を改善せず、また何人からも日本の同情を勝【克】

ちえなかつた』(二)と云っている。

その後、日本全権は絶えず『聯盟脱退』という最後の切札を振りかざして表面衝突をしている。十二月八日の聯盟総会にはスペイン、アイランド、スウェーデン、チェッコの四国の決議案の撤回を迫り『もしこれを撤回しなければ、その提案者が予期しなかつたであろう結果を持ち来たすであろう』と声明した。その頃、各国の新聞は多く『日本の××』という大標題をつけてあつた。

ジエネバにおける外交戦術を批判することは、この小文の範囲にあらず、また尚時期でもありません。ただ私の指摘したいのは、日本の内地において絶大な賞讃を得た外交が、必らずしも外交の本質からいつて世界的に効果的でなかつた点です。十二月八日の総会における松岡全権の演説は、同氏をして一躍『偉人』の列に列せしめたほどのものですが、英国の新聞はこう云つています。

『松岡氏の演説は驚くべき努力であつた、効果的な皮肉があり、また狂信的に誠実な国民主義の呼吸があつた。劇的な点からいえばかれの国際聯盟と世界の輿論に対する大胆なる否定は異色なものであつた。しかし政治的の点からみれば、これは日本を完全に謬まらしめ、交渉を殆んど無用に帰せめたところの過失であつた。始めから終りまで、そこには交渉を是認する些少の妥協的精神も、言葉もなかつた』(三)

私は、これを日本が新しく外交史上に例を開いた『背面弁護』といい、あなたの外交を『背面外交』といいます。背面傍聴席の親類や肉身は泣くほど喜ぶのですが、肝腎の裁判官に訴える力に至っては全然疑問だというほどの意味であります。

四、日本外交の饑饉

内田外相足下。

私がここにジエネバにおける帝国の外交の一部を引照したのは、そこで活動された全権諸氏の努力を少しでも割引しようとする意志ではありません。否、私は心からその健闘を謝しています。ただ私は焦土外交に発足したあなたの押しの一手の外交が結果的に見て、内地で伝えられると全然反対なのを遺憾とするものなのです。

あなたの訓令によって日本全権は十九ヶ国委員会の決議案に対して二つの修正を主張した。第一はその文案から米露の招請を除き、第二は満州不承認の字句の削除を要求したのである。これは一見従来に行掛りから当然のようではありますが、米露が仮りに招請されても、参加しないであろうことは両国の態度に見て明らかであった。なぜ日本は始めから後者の一本槍で押さなかつたであろうか。そうして居たら聯盟から『それなら招請問題は日本に譲歩するから、その代り

に他の項目は草案通りに受諾せよ』と逆襲に出られて、あわてて再び出発点に戻るの醜態を演じたり、またその後の交渉を今のように困難ならしめなかつたであらう。

元來、聯盟の決議に不満足なのは日本ばかりでなく、支那も亦然りである。支那がその決議をその俾受け入るやは疑問であつた。然るに今のところ、日本のみが聯盟の和協努力を妨げているかの如き印象を世界に与えているのは何故であらうか。私はあなたに、国策あつて外交なき結果であることを信ぜざるを得ません。

この日本の外交饑饉はただ聯盟において見らるるのみではありません。これは対露外交についても見られます。ソヴェトロシアが日本に不侵略条約を申し込んだのは、一九三一年十二月三十一日であつた。しかしてこれに対して返事したのは実に一ヶ年を経た一九三二年十二月十三日であつた。その返事が又頗ぶる曖昧なものであつて、日本国内に賛成、不賛成の二説対立していることなどを相手に話すの不見識を敢てしている。そればかりではない、これをソヴェト側が発表するや、その『不信』を頗ぶる激昂し、常に饒舌にして、對手を怒らすに妙を得ている外務省代弁者たる情報部長をしてソヴェト当局者を責めしめ、却つてソヴェト側をして『そんなことは年來の問題で、今更國民に隠しだてする必要はなく、また不発表を約束したこともない』と逆襲せしめて居る。

こうしてあなたの無策外交は、ソヴェト・ロシアを支那に追いやった。この次ぎに来るものはローズヴェルト大統領治下の米国と、ソヴェトとの握手でありましょう。××外交の行きつくところ、そこに日本の完全なる孤立は実現するのです。

五、世界の日本恐怖

内田外相足下。

世間の視聽は今や過重なる軍備の負担に向けられて、これに対する批難も少なくないようです。成程、総予算の三割七分を食う軍備の重圧は軽くない。しかしながらわれ等は外交のなきところ、ほんとに安全感があるであろうか。もし安全感が国民にないとすれば、どうして軍備の増大することを排【排斥】し得ましょう。

もし客觀的状態から云えば、現在ほど戦争の可能性のない時は少ない。世界の如何なる国も不景気に打ちのめされて、国外に事を構うる元気のある国などは一つもないことは貴方の御承知の通りです。この事は特に米国とロシアにおいて然りである。

現在米国人にして積極的に外国を攻撃しようと考えて居るものなどは殆んどあるまいと思う。かれ等商売心理からいえば、そんな事はこの不景氣の際に算盤にあわないことです。種々の事情

があるにしてもフィリッピンの独立すらも許すことにしたではないか。およそ現代の米国で、対外問題ぐらゐ国民の興味を惹きえない問題はない。

ソヴェト・ロシアも五ヶ年計画に一生懸命で、他を顧みる余地のないことは、その近來の外交方針を公平に観るものの疑いえざるところである。昨年度に軍備を増大した事実はあるが、それはスターリンが説明するように、不侵略条約を結ぶことを肯ぜざる国の存在が理由だという弁明は一応は耳に入れねばならぬ。他の国家もそうである。もし英国に新内閣が出来て、戦争を想像するような積極的対外策をとつたら、一日と雖もその位置を保持できないであらう。

かくの如く世界の状況からいふと、対外関係に関する限り日本は枕を高くして寝ることが出来る筈であるのに、なぜ日本は非常時を云い、益々××を××するか。それは日本に大外交官なくして、外交によつて国民に安全感を与えないからに外ならないのです。

外交饑饉によつて日本が蒙っている惨害はこれに止まりません。従来、日本は何において信用がなくても、その言責だけは絶対な信用を置かれたものです。英国の名外相グレーの如きは『日本の声明と約束は絶対に間違つたことはない』といつて、ヴェルサイユ平和會議の時にも、日本のためにつくしたものである。然るに最近に世界において日本の言を信ずるものはない状態であります。信なくして国家が如何にして大なる発展が出来ましょうか。

御覧なさい、南洋の委任統治島に日本が××設備を造つたといつて、今国際聯盟と米国で批難している。日本代表がそれは単に砂糖を出すために港湾を拡張したに過ぎないと弁明しても、何人もこれを信じないという状態である。或は又フィリッピンの独立が決定するや、比島において日本の野心を云うものが多くなり、それが一転してダバオの排日となり、『今にしてダバオの日本人を駆逐するか、或は日本人の事業を根柢から潰滅せしめねば比島は第二の××にならん』といつてゐる状態である。

××××××××で衝突した時に、米国の雑誌は『日本は例によつて支那の刺激行動が、この挙に出でしめたといつてゐる、併し彼等の説明は、かれ等の国内以外の如何なるところでも信じられないことは確かだ』(四)といつてゐます。日本の言が日本以外では信じられない！ 何という遺憾事だ。

これは無論、幼稚なる日本の新聞の社説などが手伝います。たとえば私の机の上には、東京朝日新聞の『字句の末に囚えらるる聯盟』という社説が拡がっています。聯盟が決議案に執着するのを攻撃したのですが、しかしこれが電報として海外に行く場合には『字句の末に囚えらるるの聯盟の方ばかりなのか』という疑問がかれ等の頭に直ちに浮ぶのは明らかです。これ等はまだいい方で、近頃国際問題を論ずる新聞の社説などは、まるで論理になつていません。

われ等が、たまらないことは、外国ではこうした論調と報導から、漸次日本の知識的頭腦を疑いかけて来たことです。英国のマンチェスター・ガーデアン紙に『日本の一研究者』と自署して出した一文もこれを証明します。

『世界は現在の闘争に関する日本の態度について益々分らないでいる。そのプロパガンデストが、戦後の国際法及び道徳を以て日本が何をなしつつあるかを説明する試みは、問題を更に混雑せしめ、不可能ならしめるにすぎぬ。しかしながら日本人自身がお互いに何をいつているかを知る時に、多少諒解が出来る』

といつて外交時報その他の説を紹介しています。『日本人自身がお互いに何をいつているかを知る時に……』われ等は文化日本のために日本の言論が、かくの如く世界から蔑視されることに痛憤を感じます。そしてこれが『挙国一致』の産物なのです。

六、外交国策決定の必要

内田外相足下。

この文が世に現われる頃は、国際聯盟の問題は一応片がついていると思う。これが何れに片がつくにせよ、日本がこの際、外交政策を根本的に確立することは、絶対的に必要である。日本の

将来は即刻にこれを要求します。故に私は貴方のイニシエチヴにおいてこの際重臣會議を催して外交方針の樹立を要望するのです。

そこでは当然、根本的な問題が議せられます。第一には貴方が議会の施政演説で述べられたところによつて、日本は局地主義をとつて、その活動を東洋に限るか、それともまた世界を舞台にするかの問題がある。あなたは局地主義を取らるる結果、出淵大使がケロッグ条約により南米のペルとコロンビアの国境戦争に関する各国會議に出ることをも否定されたようですが、それならば日本は世界的指導の位置と抱負を捨てて滿州国と二国で——支那はどうせついて来まいから——暮す覚悟でなくてはならぬ。いづれにしても、それは貴方一人で宣言し、決定してしまうには余りに大きな日本の国策である筈です。

第二には日本は何を目がけ、どこに行くかを明確に決定して、世界に発表せねばならぬ。これが明瞭でないから、世界はどここの隅の果までも日本を懼れ排斥しているのです。これを日本側からいつても、この目標がない故に、無限に對手を増さねばならぬ。かりに日本は軍備を米露に備えることが出来ても、これを更に英、仏その他に延長し、結局世界を對手にすることが出来ますか。前に述べたように軍備の縮少は国民の安全感を前提とします、そして安全感の製造は、あなたの領分である筈ではないか。

この大方針が決定し、世界の日本に対する誤解が解ければ、第二の政策に移ることが出来ます。たとえば米国は三月四日から民主党内閣になり、新たな平和政策に出たがっているのですが、日本が米国と比島不侵略をふくむ両国の太平洋条約を結ぶことは極めて適当であり、また容易でもある筈です。また労農ロシアに対して不侵略条約を結ぶことは元より可能であり、かくて戦争の危険がなくなれば、陸海軍予算に削減を加える合理的根拠が出来あがるのです。

しかしこれ等をなすのには過去の外交政策を清算するつもりで、重臣会議でも催さねば国内でもしょうが、海外国が第一信用しません。われ等は外務省が国際聯盟の第十五条三項がどうの、四項がどうのなどという末梢に対し、国家をかけるほど騒いでいて、国際国家がよって以て立つ信義を海外に失したことに對し、まことに痛恨にたえないものであります。

最後に私が、こう貴方に希望することが、決して易きを求めるのでない一事は、ここに附記しておきたい。私の解するところによれば、わが国民は誤まれる××【教育】のために、外交を××【戦争】と心得ています。かれ等の重大なる関心事は勝つか敗るかであつて、国家百年のために幸福であるか、不幸であるかではない。小学生徒までが、松岡全権に血書を以て激励している有様を御覧なさい。かれ等は一体何を『激励』しようとしているのですか。

昨年の七月、英首相マクドナルドが、ローザンヌ會議から歸つてヴィクトリア停車場につくと、

満都の民衆は街上に堵列^{とれつ}し、凱旋將軍の如くに、かれを歓迎した。歓迎されるかれは何をなしたか。ローザンヌ会議で英国の外国からとる債権を負けて、会議を成立せしめたのです。日本ならば屹度、拍手の代りに投石が待つていたに違ひないのです。

この国民の間で外交をやることの如何に困難であるかを私は知っている。外国ならば反対党や自由主義者の演説によつて、安全弁をなす議會も、日本に関する限りは一つの異論の存在を許さず、満州国の際は挙^{こぞ}つて承認決議案を通過し、今議會においても聯盟脱決議案提出の内議があったほどであり、また一議員の議論に圧迫を加えたことは周知の事実です。こうした事が結局國家のためになると思うほど、かれ等は外国の事情に無智であり、外交の本質について諒解しえな

いで居る。

しかし私の貴方に対する不満は、この国民の弱点——私は弱点だと思ふ——を、是正しないで却つて利用していることである。強硬でさえあれば喝采する国民の心理を乱用して、焦土外交をいい、向う見ずの自立外交を主張している点である。そしてそこに何等の目標と、抱負と、政策なくして、ただ猪突して、日本を全く孤立に陥れたばかりでなく、その×××な人事行政の如きに至つては××××××××【×四つ追加】るものである。

私は國家の前途を、心から憂えるものとして貴方に祈願する。あなたはこの重大岐路に立つ日

本を救うために、日本の輿論に背を向ける意志はないか。大外交家が日本で人気よかつた試しはない。今こそ大外交家といはれる小村外相は、ポーツマスで平和条約を結んだがために、東京の焼打と国民的反感の標的となつたではないか。現在、小村の見識が謬つたことをいうものがありましょうか。私は貴方がせめては小村侯の決意と見識とを持たれることを祈るものなのです。

もし貴方にこの決心がなかつたら、私は国家のために貴方が辞職さるることを要望する。貴方は過去において既自身に対する責任を感じていねばならぬ筈である。今、問題になつてゐる九ヶ国条約は、【問題になつてゐる国際聯盟の規約も、九ヶ国条約も、】貴方が原内閣の外相時代に生れたものである。貴方がまた聯盟が責め道具にしてゐるパリ平和条約も、貴方の手によつて調印されたものである。貴方が現在のように頑強のならば、なぜ当時、満蒙に関する除外例を留保しなかつたか。【】英国はスエズの防備権につき、米國はモンロー主義につき留保したではないか。これをしなかつたところに日本の弱味がある。これだけでも貴方は責任をとるべき理由がある。殊に日本が始めから『正義』と『平和』を主張していながら、世界はこれを拒絶しました、【】即ち日本の正義と平和は世界に通用しないという觀念を、日本の青少年に与えたのは、あなただけではいけないけれども、当局者の責任である。貴方はこれを思想上、教育上由々敷い大事だとは思いませんか。

意長くして筆短し。もし言の礼にそわないものあらば、國家の前途を憂うる誠意の飛沫のみ、

寛恕を乞います。

(昭和八・二・七)

- (一) Manchester Guardian, Nov. 25, 1932. P. 14
- (二) 同上
- (三) Manchester Guardian, Dec. 9, 1932
- (四) The New Republic, Jan. 11, 1933

松岡全権に与ふ 『中央公論』 1933.5号

清沢洌

一

松岡全権足下。

なによりもまず貴下^{あなた}が重任を果して無事に帰朝されたことをお祝い申し上げます。

この文を書いている時に、あなたはまだ米国に居られました^が、あなたが横浜、東京に入り込む時の光景が、今から想像されて胸の踊るのを禁じえません。上は廟堂^{びやうどう}の顯官から、下は都下数万の小学生までが、沿道人橋を造つて、いかに感激と誠意を以てこの時代の英雄を迎えるでありましょうか。あなたの古い友人として、われ等は自分事のように誇りと喜びを感じます。

私は今、あなたを迎えて、計らずも二十七ヶ年以前に、同じ米国から帰った日本全権小村寿太郎男を想起します。あなたに對して、ラヂオと、歡迎の渦巻と、国民の喝采が待つてゐるのに對比して、日露戦争を纏めて帰つた小村全権の祖国には、氷のような冷遇^{れいぐう}と、非難と、憤怒が立ちふさがっていました。時の官憲の好意で、長男の小村欣一氏が横浜の沖合まで父を出迎えに行くと、寿太郎男は一目みて、

『ア、お前はまだ生きていたのか……』

と暗然として、わが子の手をとつたとのことであります。

小村全権が、こういつたのも無理はなかつた。講和會議を通じて、終始かれに達した報道は、驚くべき強硬なる故国の輿論でした。いよいよロシア代表ウキッテと講和条約が出来あがつて、これに調印せんとする九月五日には、帝都の不滿は××して、ために×××はしかれ、×××××の×××××されたもの百六十九、××一千三十名に達したのであつた。そればかりではない。昂奮した一部の群衆が外務大臣官邸に押しよせて、講和會議とは縁の遠いかれの留守家族に××を加えんとした事実をかれが知つたのは、実に會議の最後であつたのです。

この國民の不滿と憤慨を知りながら、かれはその不人氣なる外交々渉を纏めたのでした。かれから見れば、かれの家族が生き残つていたのは寧ろ不思議で、恐らくは國民憤怒の犠牲になつていたと考えたであらう。欣一氏は父親に『お前はまだ生きていたのか』といわれ、挨拶する言葉もなく、ただ涙が下つたと、生前、親しい友達に當時を顧みて述懐したと聞きます。

小村全権の淋しい都入りに比して、あなたはまた何という華々しさであります。

二

松岡全権足下。

小村全権が行かれたポーツマス会議と、今回あなたによつて代表されたジエネバ【ジュネーヴ】会議とは、何とよく似ていることか。日本の歴史において最も重要な劃期的会議たる点において同じであります。世界の桧舞台において全人類の注意を集め得た点において似ています。大学教授というものが出て、貝加爾^{バイカル}以東の割譲を説き、露都進撃論を唱えて、強硬論の先頭をなしたことも、今回、数は更に多いが、学者の聯盟が出来て衆論をひきいたことに似ているではありませんか。

しかし当時と現在と比較して異なつた点が少なくとも三つあります。一つは日露戦争当時にあつては、総理大臣桂太郎と、外務大臣小村寿太郎は一体となつて、いかに民論の迫害があろうとも断乎として講和会議を纏める意志のあつたのに対し、ジエネバ会議の場合には、総理大臣齋藤実、外務大臣内田康哉は民論の赴くまゝに動くというよりも、寧ろ民論に責任を転嫁して、『輿論の趨向』とか『国民の総意』とかと、この蔭に隠れんとしたことであります。

あなたも知られる通り、当時の首相、外相は国家のためにまことに決死の覚悟をしていました。かれ等の頭には国家百年の計あつて、自己と家族の安否は元よりなかつた。講和条約に調印してポーツマス談判の大幕を閉ずべき明治三十九年九月五日のことである。小村全権は嵐のような故国からの抗議を前にして、海軍工廠の会場に赴きました。署名が終つて記念にシャンペンの杯を

あげることになりましたが、接待の係員が盃を持つて来ることを忘れた。ホテルに行つてこれを持つて来る間、今まで会議で睨みあつた日露全権は始めて款談した。ウキツテと仏語で話した後、コロストヴェッツが進んで小村に平和の克復を賀すと、小村男は、

『自分は本国の多数者より非難を受くべきを確信する。けれども何人も総べての人を満足させることは不可能だ。露国にも亦幾多の不満足な者が居ろう。さりながら群衆心理は時局の難関を解するものではない。吾々の業は椽^{えん}の下の力業に類する。われ等は啻^{ただ}その義務を果したことを以て満足すべ

きだ』(一)

といった。かれが自己の義務を行うのに愚痴をこぼしたことをわれ等は嘗て知らない。しかし大任が終つて、同じような立場にある對手と握手した時に、思わずこうした独語にも似た感慨が湧いたことでありましょう。

これを三十年を経た今日と比するといふ相違でありましょうか。『何人も総べての人を満足させることは不可能である』といったかれの言葉は、事実によつて裏切られています。聯盟と断つた内田外相は『総ての人を満足させて』いますし、あなたを歓迎する国民の熱意も、国民挙げてあなたの行動を裏書きしていることを示します。

第二に当時と現在と異なる点は、桂と小村が絶対に、わが国の国際的孤立を避けんとしたに對

して、斎藤、内田は寧ろわれから進んで孤立を選んだ傾きあつたことである。小村は講和談判において、血の出るような争闘をしている間にあつても、かれの眼はこの時局の終末と同時に、露国と手を握るべき政治工作を目かけていた。故にかれは最後に『予は露国全権両閣下に証言する、この条約を日露両国間の恒久的平和善隣の一条約たらしむるについて、能う限りの力を尽すを以て、予の義務たり將た快樂たりとすることを』と述べたのであります。これを單なる外交的辞令なりとなすなかれ、その後、日英同盟に加えて日露提携が具体化したればこそ、米国の満州干渉を一蹴できたのであることは、外交史を読むものの何人も知るところである。

第三に当時と現在と異なるところは、日清戦争の時も、日露戦争の時も、必らず衆論に抗して毅然として立つ少数有力者があつた。たとえば国権主義者の巨擘として知られていた谷千城の如きすら『野夫は……恐露病なり秦檜之徒なり杯、悪口せられ、已に一昨年は身に危険を感じたことさえあり』しに拘わらず、敢然として平和論を主張したのであつた。^(三)しかるに昭和八年、同じ国家の危険に面して、説の当否は問わず、××××のために説をなすものは何処にありませんか。

この時に、あなたは重任を果して堂々と帰朝せられるのである。あなたの無事なる顔を見て、
i 「しんかい」中国南宋の宰相で、主戦論者を押さえて金と和議を結び、奸臣の例にされている。

われ等友人の幸慶、何ものかこれにすぎましようや。

三

松岡全権足下。

あなたが重任を負うて東都を出発された時に、私は東京駅にあつた。あなたの知遇を受けたものの一人として、せめてはその鹿島立ちを見送らんがためであつたのです。しかし東京駅に行つて、あなたと言葉をかわすことなど到底出来ない相談であることは、直ぐ分つた。なにしろ、広場一面に身動きも出来ない人浪である。マグネシウムの音、万歳のどよめき。そこへあなたの青白い顔が、かゝえられるように現われました。

私はあなたを乗せた汽車を見送りながら、二つばかりの想像が頭の中に浮び出るを禁じ得なかつた。

第一にはその晩にジエネバに使いするあなたが『幣原喜重郎』であつて、満州問題が起つた当時の外相が『松岡洋右』であつたとしたら、日本はどんなにか適所に適材を得たろうかという夢のような想像でした。満州問題が起つた際、日本が切つた啖^{たん}呵^かは、余りにその声が細きにすぎた。それは国内に対してもそうであつたし、国外に対してもそうであつた。日本は異常な決心を以て、

これに対していたのであるから、そしてドラモンドさえもいうように強い立場と理由を持つていたのであるから、これに対してはもつと強い声で世界に見栄を切るべきであつた。これには松岡洋右の地声は、日本の誰の声よりも適當であつたと思うのです。

しかし現在あなたが赴きつつあるジエネバの舞台では、あなたの声は果して適當であるであらうか。そこは啖呵を切つた後で、まとめる場処である。世界の大国として元より自屈である必要はないけれども、前後策には常に妥協と譲歩を必至とします。あなたがこの方面の特長に、多少不得手であるということは、毫末もあなたの価値を下げることはありません。吉右衛門と菊五郎には各々得意の舞台があります。ジエネバの舞台に、もし肌ざわりの柔かい、理屈づくめの、そして小さいところに氣のつく幣原男でも持つて行つたとしたらどうであらうか……。

松岡全權足下。

どうぞ言の率直なるを許して下さい。私はあなたの汽車を見送りながら考えたその時の空想が、今なお頭の中を去らないのです。ジエネバにおけるあなたの善戦を何人か疑いましょう。これを国民として感謝することにおいて、私は何人にも劣りません。しかしあなたを、この舞台に踊らした内田外相の人事行政については、私はなお多少の疑いを持つている者なのです。

あなたの特長は直情径行にあります。今後、この特長が恐らくは日本の社会で貴方^{あなた}をして大になさしめると思う。が、ジエネバで必要としたのはそれだったろうか。

ジエネバにおいてあなたの個性は光りました。日本に極めて同情ある一米人が『日本はワシントン会議においては余りに少なく喋った。しかしジエネバにおいては余りに多く喋った』といったのは、あなたとしては寧ろ誇りかに感ぜられるところでありましょう。またジエネバ雀の囁きとして、ドラモンドと貴方^{あなた}との間柄について、杉村陽太郎君などが徒らに気をもんだという噂も、廻りくどい英人外交官と、正義と率直を一本槍とする貴方との関係が目に見えるようであります。

更にあなたの個性を現わしたのは、貴方の米国に対する声明である。あなたはジエネバに居る時から、大西洋艦隊を太平洋から引つこますべしと声明して来た。この事は両国の識者が一様に考えて来たことではありますが、一国の重要な地位に居るものが、これほどあけすけに云った例は恐らくは他に例がないであります。故に東京朝日の特派員は『アメリカ国民の対日感情が決して良好といえないこの際にあつて反省のいとまなくして寧ろ反感をそつた感がある。国民的諒解の欠如している際におけるこの種の言廻しが、兎角反対の結果をもたらすことは、かの排日移民法通過の経緯でも知られる』^(三) といひ、また日本に悪くない紐育^{ニユーヨーク}イヴニング・ポストが、

『松岡氏は日本が満州を経済的よりも、寧ろ軍略的に必要とする所以を説明するに多少成功し

たが、一方事実上日本海軍の増加となるべき満州国の海軍力建設については白を切り、また日本の聯盟脱退後における南洋諸島把持の主張及び太平洋の米國艦隊引揚の勧告をなしたのは、敬意と好感を以て迎えることが出来ぬ。結局有名なるこの來客は、説明的であるよりも、寧ろ挑発的たらんとしてゐるのではないかと疑われる』^(四)

といつてゐるのは、あなたの大胆なる言説を一部で、いかに感じてゐるかを示すものです。

私がここでこれを引用したのは、その事の当否ではありません。フランクネスを好む米國人にこの種の言廻しが、案外に效果的であるかも知れません。ただ私は事務的人物を要するジエネバに、大胆率直なる貴方が行つたことに多少の惑いを感じた想い出を語らんがためなのです。

四

松岡全權足下。

あなたの汽車を見送りながら、今一つ感じたことは、怒濤のような民衆の熱意に送られた生一本の貴方が余りにこれに感激しすぎはしないかということであつた。

貴方は政治家であります。その眼が常に民衆の動きを離れない政治家であります。民衆政治の現在において、この事は元より当然でありますが、しかしこの民衆は小村全權が云つたように『群

衆心理は時局の難関を解するものではない』場合が決して少なくない。いな、現在の如く国際關係が複雑微妙に働いている場合には、民衆はその全貌をつかんで、国家百年のために計をたてるといふようなことが果して可能でありましょうか。この事はヴェルサイユ条約の改訂、戦債問題の解決などに関する欧米国民の態度でも知ることが出来はすまいか。

われ等は民衆の声を土台とする議會政治に異議はありません。しかしながら国家の絶大なる難局に面した場合には、暫らく輿論を無視し、国家のために一身を犠牲にするのも国民、殊に指導者の任務ではないでしょうか。昔はこの種の指導者は、確かにわが国に事を欠かなかつた。貴族とか官僚とか云われる人は、自から矜持するところが高かつただけに、所謂国論——平民の声を無視して国家の運命を双肩に負うの決心と覚悟を有していました。優れたアリストクラッシーの特長はそこにあります。小村侯の如きはその一人でありましょう。

然るに今や、こういう国士的矜持を有している者が何処にありますか。かれ等はキング・モツプ（群衆王）の前に平伏し、恐怖して、ただその御機嫌を失わざらんことにとめていてはいないか。

私の知っている本来の貴方はそうではなかつた。しかし政治家として、投票の数と大衆の声とを味方とする境遇に立つてからの貴方が、もし東京駅頭の光景を以て日本の輿論の全体なりとし、

その指示するところにのみ動くようなことがあつたら、——即ち目を国家の大局に馳せるかわりに、大衆の声にのみ聞くようなことがあつたら、百年後の歴史家の筆は果してあなたに對して温かい好意を持つであらうか。

そしてそれは前途を有する政治家たる貴方^{あなた}にとっては相當に強い誘惑であると私は考えました。ことにその後のジエネバにおける貴方の行動が示したように、大衆を前にしては相當に芝居気もある——政治家には必要であるところの——貴方にとっては、最も警戒すべきことのひとつと考えたのでした。

とにかくこうして私は、歓喜と危惧と憂慮と、いろいろな感じを以て鹿島立つ貴方を、東京駅に送つたのを忘れないのです。

五

松岡全權足下。

私は今ここで、ジエネバにおける貴方の行動を批判する意志はありません。それは後世の史家の領分です。ただ遠くからの傍觀者の眼には、始めに強く、寧ろ我武者羅^{がむしゃら}にさえ出た貴方は、最後において何とかして纏めようとしたことは間違いないようであります。

また事実、ジエネバにおける外交は日本にとって相当に有利に廻転していた。一種威脅的な態度を用いた戦法は、私の同じ得ないところであるが、しかしそれでも聯盟側は漸次後退して、日本に譲る態度に出ていました。十一月二十八日の理事会で譲り、十二月七日の総会で折れ、十九ヶ国委員会でも日本の主張に屈した。殊に最後のドラモンド杉村案の如きは最も難関である満州不承認問題を、単に議長の宣言によることにし、日本はこれに承服せざることを堂々と声明して結着をつけるものであった。

私が聞くところに謬りなければ、あなたはこれを承認したい意向のようであつて、政府に対しても右の旨請訓したと聞いています。その頃、あなたは親しい人と好きな散歩に出られて、ジエネバ湖の水に見入りながら染々と話された――

『おれはこうして譲つたことに対して国に帰つたら真先きに国民に陳謝する。おれに力なくして日本の主張を全部通せなかつたことについては、心から責任を感じているんだ……おれが東京駅を立つ時から今まで、激励の手紙を受けたことは万を越えているであろう。会議が閉になつたので先頃それを整理してみたよ。ところがその中で「会議を纏めて来てくれ」と書いてあつた手紙が、ただ一通だけあつた。しかもそれが無名だつた。君、おれはこの一人をほんとに愛国者だと思ふね』

あなたはこの言葉に、元より責任を持たれる理由はない。あるいは間違っているかも知れないし、かりに間違っていないくても旅先きの散歩話し、重要視される必要はない。しかし私はこの言葉に、当時の貴方の心境が見出されるかと思うのです。

しかし茲で不幸なことは、あなたには頑強、石のような長官があつた。これも、もし私の聞くところに間違いがなければ始めから終りまでかれのみ一人頑張つた。強硬を以て世間に見られてゐる或方面でさえも承認したこの案を、かれのみがただ横に首を振つたというのです。聯盟と手を分つ場合にも、部下の各局長が殆んど全部纏めようとしたのを、かれは『今まで何回も、出先きのものも出る出るといつて来た。今更どうにもなるかい、それなら俺はやめる』とまで云い出したそうです。自分が始めから焦土外交を叫んで来た關係上、自身の言葉に縛られて、どうにも転身の道が発見できなかったのである。

これについては、私は既に他の機会にも述べたことがあるから、ここでそれを繰り返しますまい。しかしそれにしても何という無策、何という無能でありましょう。二十世紀において日本が面した最も大きな悲劇は、重大な場合にゴムが化石したことであります。

松岡全權足下。

幸いに誤解しないで下さい。私は今更に何時までも日本の外交的無策を嘆いているものでもなければ、また聯盟に執着しているものでもありません。現実主義者としてのわれ等の立場は、現実の事態を既遂事実【fait accompli】と見て、今後如何になすべきかを考える点にある。これがこの書を貴方に呈する所以でもあるのです。

この問題を考えるに当つて私は二つの不安を有している。第一には現在の日本が、驚くべく建設的具体策に欠けていることとあります。私は聯盟脱退に関する数十の言説を読んだ。が、それは悉く日本が絶対正義であつて非は全然聯盟にある事、日本は経済封鎖にあつても困らない事、聯盟は日本が脱退して骨抜になつた事というような勇壮活潑なものばかりであります。

これ等は悉く事実でありましょう。しかし明らかなことは、日本の正義を百万遍繰り返したところが、この国難は決して去らないことである。聯盟脱退をなした当局者と、その主張者は今少し親切に、日本が今後如何になすべきかの具体案を示すべき責任がある筈ではないか。時に御用学者から『極東平和聯盟』などという奇妙な説を聞くが、少し頭腦のあるものなら、それが如何に客観的状态を正視しない説であるかが分る筈である。

われ等は今、外交饑饉と同時に、建設的対案の饑饉に面しています。聯盟脱退に際して、内田

外相は『共に相戒めて協心一致難局を乗切るの大覚悟』の必要を説き、鈴木政友会総裁は『純正なる国際正義の徹底』を主張し、若槻総裁は『威信を発揚するの十分なる覚悟』と云い、安達国同総裁【安達謙蔵国民同盟総裁】も『世界的には国際正義に立脚して堂々たる大国としての襟度を示さねばならぬ』といっています。かれ等が如何に空漠なる文字に眩^{くら}ませられているかを御覧なさい。国民としてわれ等の知りたいのはこの抽象文字を現実宛てはめたら、どういう具体策になるかである。国民は覚悟をして何処に向うかである。国際正義を発揮するのには具体的にどうするかである。一の具体的方針を示すなくして、徒らに覚悟を強うるのは、病人にうんとふん張れというようなものではないか。

第二にわれ等が憂うところは、国民の不安であります。前にも書いたようにわれ等は必らずしも、聯盟脱退を恐れない。われ等が恐れるのは聯盟脱退の事実それ自身ではなくてそこから来る国際不安であります。最近の新聞は毎日何かしら、この不安を反映している。南洋統治回収にドイツが乗り出したといつて、大文字で報ずる翌日には、『某国機関奉天に秘かに大無電台設置』という記事があり、更にその横には東支鉄道に関するソヴィエト聯邦との交渉が、重大事件として書かれています。近來米国に対しても英国に対しても、外交問題に関する国民の関心は想像以上のものがあるようです。

こうした状態が継続すれば、それでなくても国内の諸問題で疲れている国民は、神経衰弱症にかかつてしまう懼れはないではありませんか。われ等は何とかしてこの不安を取除かねばならぬ。

七

松岡全權足下。

繰り返して申しますが、私は国民の一人として心から貴方の善闘を感謝したいと思う。注文をつけるのは、国家のために少しでもよかれかしと思う慾心からで、あなたが日本をさがして最適任者の一人であつたことは、天下万人の認めるところであります。

しかしそれに拘わらず、私の知っている貴方は必らず自己に対して、重大な責任を感じていられると思う。あなたが善闘したことに疑いはなくても、兎に角、聯盟と手を分つに至つたのは貴方の手によつてである。そしてこの結果、日本は明治維新以来始めて世界に孤立したのであります。従つて国際日本の再発足については、貴方は何人よりも責任があり、抱負もあるであらう、外務省の希望に反し、特に米国を通過して帰朝したのも、これがためではないでしょうか。

私の信ずるところによれば——そして日本国民が恐らくは一人の異論のないことは、日本は今後、満州国を守り育てねばならないことです。これはわが国自身のためであると同時に、世界に

対する義務でもあります。もし満州国が無事に成長し、立派な国家にさえなれば、聯盟の不承認決議などは実際問題として失くなってしまいます。現に今でさえ、満州国の進歩を述べ、混乱している支那と対比して、楽土の出現を祝している者が米人の間にすらもあるほどなのです。^(五)今後、更に支那の民衆がその混乱を嫌つて、争つて満州国に行くことを希望するようになれば、上海の英人系の新調もいったように、満州国、従つて日本の地位は非常に強くなるわけであります。

しかしながら貴方もよく知られるように、これは決して簡単なことではない。バーナード・シヨウが、『日本は逆も自分で食えないものをつた』といったのは、かれ一流の皮肉と聞き流しているが、それが重大な事業であることだけは疑う余地はありません。

そこで日本としては、ここ当分、他を顧みずして満州国を護りたてすることに努力すべきではないでしょうか。そしてこれをなすのには日本としても、満州国としても、四辺の安全を保証されることが第一に必要なことである。それでなくては到底満州国の発展に没頭することは不可能である。

それにはどうするか。第一には日本が全面を露出している米国と平和を確保すべきであります。即ちフィリピン島中立などに対して、我から進んで提言すべきである。われ等の知る範囲では米国新内閣は中立条約を希望していると信ずべき理由がある。南洋委任統治の問題なども、日本

が騒ぎすぎるから、米国でもボチボチ気がついた程度であつて、それほど問題にして居らないのは、米国の朝野の有力者に逢つたあなたが、誰よりも知つて居られる筈であります。

第二には満州国が全面を露出しているソヴェト・ロシアと不侵略条約を結ぶべきであります。満州国が平和的發展をなして、世界の模範国たらんがためには、是非共隣国との友情關係の維持を必要とします。これは余りにも常識的事実である。あなたはそうお考えになりませんか。

第三には満州国が長城をへだてて相接する支那との關係を改善することです。現在の狀態では両国とも、進んでどうすることも出来はしませんが、しかし双方に神經を刺激しないで、『時』を待つ方法に出ずることは出来る筈である。

八

松岡全權足下。

もし日本の根本方針が、一部において伝えられましたように、西洋と全然縁を断ち、全力を東洋に向けるのならば、私はこんな説を持出して、貴方を煩わさなかつたかも知れません。しかしながら日本の根本方針は、畏くも陛下の詔書によつて明らかになりました。

怖れ多いことではありますが、近来この御詔書ほど、われ等に深い感銘を与えたものはありま

せん。どうぞ私をして、今一度有難い御言葉を繰り返さして下さい――

『然リト雖國際平和ノ確立ハ朕常ニ之ヲ冀求シテ止マス是ヲ以テ平和各般ノ企図ハ向後亦協力シテ渝ルナシ今ヤ聯盟ト手ヲ分チ帝國ノ所信ニ是レ從フト雖固ヨリ東亜ニ偏シテ友邦ノ誼ヲ疎カニスルモノニアラス愈信ヲ國際ニ篤クシ大義ヲ宇内ニ顯揚スルハ夙夜朕カ念トスル所ナリ』

聖旨を案ずるに國際聯盟とは、滿州国の新興に關し帝國と所見を異にするのであるから離脱するのであるが、しかしながら『固ヨリ東亜ニ偏シテ友邦ノ誼ヲ疎カニスルモノニアラス』して『愈信ヲ國際ニ篤クシ』給うのが大御心なのである。

即ち國際聯盟と袂を分つたのは、偏えに滿州国についてであつて、他の平和機構については寧ろこれと協力して大義を宇内に顯揚する御趣旨と拝察し奉るのであります。

この事は總理大臣の告諭において更に明らかであつて、『向後も依然として人類の安寧福祉を目的とする國際事業に参与協力するの方針を一貫して何等渝^{かわ}る所なし、又敢て東洋に跼蹐^{きよくせき}して偏安を事とするものにあらず』といつていられます。私が特にここにこれを引用致しますのは、國際聯盟脱退によつて何等か國策が変更したかの如き感をいだく者があるのに対し、決してその然らざることを朋らかにし、恐らくは國際聯盟を全体として排撃することすらも、御聖旨にあらざるかを拝察する者なることを附言しておくのであります。

もし私のこの解釈にして謬りないとすれば、あなたもその一部の責任に坐して破れた国際関係は——敢えて国際聯盟関係とはいわず——あなたの手によって新らしく再建さるべき機会を待っているのではないか。そして国民に信任あり、国民の輿望を負うている貴方は、これをなすに最も適当な人である。これ我が国家のために、面をおかして貴方に一書を呈する所以であります。

最後に私は今一度、今回の大任を果された貴方の労を謝したいと思う。あなたは国際聯盟の総会において日本のために気を吐き、世界は日本という義人をキリストのように十字架にかけるのだと叫ばれました。われ等国民からすれば、あなたは日本の国策の故に、異郷において祖国のために十字架にかかったといつてもいいと思います。外国の新聞雑誌に目をさらすものでなければ、現在の日本が如何に世界に不人気であるかは想像がつかないであろう。最近到着した紐育タイムスには、ロンドン特電として『松岡ロンドンの群衆に嘲わる』との題下に、

『松岡氏は放送二時間前に到着した、警視庁は異常な警戒を以て氏を警護し、氏は警官の厚い行列の中を通過した。放送局の外には、松岡氏に「日本は馬賊の国だ」と叫んだ者あり、また氏が建物の内部に急ぎ歩くのを見送つて「恥を知れ」との叫び声が続いた』^(六)

とあります。場処が冷静を以て鳴るロンドンだけに、他の場処も想像されて同情にたえません。謹んで貴方の今後の健勝と奮闘を祈る。

(註)

(一) 信夫淳平著『二大外交の真相』五〇一ページ【国会図書館デジタル化資料】

(二) 『谷干城遺稿』下巻、六七七ページ以下。『日本は今や一ヶ年半之長日月に随分とも兵は疲れたり。金子も枯渇に至れり。開戦以来戦費として政府直接に費消せし処、十三億二千万円なり。その中五億は内債、八億二千万は外債なり。しかも皆頗る高利の借金なり。野夫はご承知の通り非戦論にて、支那保全杯と唱え、隣国の為に戦うが如き余力なきを信すれば、何とかして戦を避けんと欲せしも恐露病なり秦檜之徒なり杯、悪口せられ、已に一昨年は身に危険を感じたることさえあり。今や野夫が見は殆ど適中し人々失望の極に陥らんとす。』『谷干城遺稿』下巻、六七六頁、国会図書館デジタル化資料】

(三) 昭和八年三月二十二日東京朝日新聞

(四) 紐育イヴニング・ポスト三月廿五日

(五) 紐育ヘラルド・トリブюн特派員キース氏の通信及びアトランタ・コンスチテュション

(一九三三年一月三十日) 社説

(六) 紐育タイムス一九三三年三月十二日

幣原喜重郎男隨談錄 【中央公論1940.5 無署名記事、後記にも記されていない。】

誰れが最初に称えたかは詳かでないが、外務大臣の姓をとつて、何外交と言う呼び方は、幣原喜重郎男に始まっているようである。その功罪に就いては外交史家の論及するところであるから、こゝで触れる必要はあるまい。然し世に幣原外交というものが喧伝されて来た点だけから見ても、それが特に際立つた存在であつたことは否定すべきではなからう。また幣原外交は以て軟弱の同義語の如く解する向きもあるようだが、何れにしても、わが外交の上に一つの時代を劃するものであつたことは、誰れしも認めているに相違ない。次いで田中外交、内田外交、廣田外交、有田外交などとわが外交の潮は慌しい国際情勢の間に処して、流れて来ているのであるが、今は国民外交が唱えられ、且又外交に対する関心が異常に昂揚せられている時、幣原外交の軌跡を一応辿り直すことも、あながち無意味ではない筈である。幣原男は大正十三年六月、第一次の加藤高明内閣の外相として始めて、わが外交指導に当り、爾来昭和四年十二月第二次若槻内閣の外相としてその職を去るまで、実に五代の内閣に列し、その間田中義一外相の二年を除いて、約五ヶ年に亙り霞が関の主人公として大きな地歩を占めていたのである。その五ヶ年間には、今更ここで繰り返すまでもなく、国際的に幾多の大きな問題が処理されているが、一言にして尽せば、国際協

調主義の徹底、それに依る世界の信頼性の把握という点に基調が置かれていたように見受けられる。『……帝国の權益を擁護増進すべきは論を俟たない。しかし相手にも同様に權益の主張がある。その場合には、両者の中間に於いて、なるべく我に近いところに一致点を発見するのが、外交の要諦である。』と大正十三年六月の議会で、幣原外相は述べているが、これが幣原外交の核心をなすものであり、その指導精神であつたと解しても、誤りではないと思われる。けれども変転する時代の急潮は、満州事変の突発となり、幣原外交に対して一応終止符を打つことになつたのである。それから現在まで十年の歲月は慌しく去来し、外交の上にも起伏ただならぬものがあり、われわれは支那事変を通じて、東亜新秩序建設の聖業に直進しつつある。しかも現実の事態は新しい段階へ足を踏み入れ、それに応じて新日本外交の確立が期待されているのである。こうした時代にあつて、十年固く門戸を閉ざし沈黙を守っている幣原男は、果して何を考え、何を為しつつあるかを知ることが、率直に言つてジャーナリズムの注意を惹くに充分であらう。然しながら、単なる興味を以て今更活字の舞台に登場させられることは、『至極迷惑である』と男は又極めて率直に表明するのである。そして固くその胸を閉ざして、容易に打診さえも許さない。だからこの随談録は男の片言隻語の集積とならざるを得ないのである。と同時に単なる思いつき、或は興味本位的な筆をとることは極力避けなければならないのだ。世間に対して殊更『ものを言いたく

ない』男の立場と、何かを聴き出そうとする筆者の立場とは、言わば交ることのない平行線上にあるのかも知れない。それを敢えて交らせようと試みたのが、この一篇の筆録なのである。従って断るまでもなく、文責の筆者に在ること当然である。

○

千駄ヶ谷の宗荘な邸を、筆者は再三訪れて明るい応接間で、幣原男と対坐した。男は常に健康色を双頬に漲らせながら、筆者の質問に応じて、簡明にしかも慎重な用語を以て答えるのを常とした。嘗つて外相当時「その対支政策に於いて、内政不干渉の語を避け、特に内争不干渉という辞を用いていたが、それ程用語に慎重を期する。それは勿論外交の衝に当るものの当然の心構えに相違ないであろうが、男の場合にあつては、性格的な手堅さが窺われるのである。欧州に於いて所謂春季攻勢なるものが、単に掛け声ばかりに終るのではないかと見られていた際、晴天の霹靂の如く、北欧に戦火が揚つた。質問はまずこの新しい事態に関して試みなければならぬまい。

—

独仏国境戦線が、膠着状態に陥つて、所謂神経戦を繰り返し、双方共容易に抜くことが出来な

i i 1940.4.9 ドイツ軍デンマーク占領、ノルウェーにも侵攻、6.10 ノルウェー降伏。

以上、当然何れかにその捌け口が向くであろうということは、予想されるところであつた。従つて今度北欧がその捌け口となつた訳であるが、軍事的に果してこれが如何なる展開を見るであらうかは、専門家でないから予想し難い。また事態をこゝに發展せしめた原因に就いては英仏側にも、独逸側にもそれぞれの主張があるようだが、その批評などは輕率になすべきではあるまい。たゞ外国の新聞などに依つて、感得せられることは、独逸が瑞典スウェーデンの鉄鉾資源の確保を目標としていたことである。独逸としてはルーマニアの石油とこの鉄鉾資源の確保が急務であるに相違ない。従つて資源確保を主目的として、北欧に触手が伸びたものと解されるが、この見地からは大掛りな消耗戦が行われるとは予想されない。近來の欧州の紛乱に於いて、常に多大の迷惑を受けているのは、中立国であるが、今度も丁抹デンマーク、ノルウェー、諾威兩國は直接戦火の下に置かれ、非常に氣の毒な立場にあるだろうと思われる。斯様に中立国が一種の犠牲に供される状態は決して正常なものとは言ひ難い。國際法の如きも一片の反故の如く視られて居る現状が、果して永く続くものであるか否かは疑問である。將來は必ず新しい秩序が生れることであろう。戦禍が次から次へ中立国に波及するようになれば、平和への希求は、先ず中立国側から熾烈に揚るかも知れない。英国の新聞雜誌などを見ても、別に新しい理想ではないが、欧州聯邦案などが頻りに研究され、論議されている。欧州聯邦とは、どういう組織であるか、それは簡単に説明し尽すわけにはゆかないが、要す

るに各国の主権の一部、つまり宣戦、講和などの権能を聯邦中央政府に委せて、各国はそれぞれの生存を続けようという理念なのである。これは一種のユートピアと見られるかも知れないが、著名な政治家や学者の間にあつても、真面目に而も真剣に考究せられているようである。北米合衆国は最初は十三州、現在では四十八州に分れているが、その各州は何れも一国家の如きであつて、必ずしも常に利害が一致している訳ではない。それが平和を保つて合衆国としての繁栄をつづけて居るのは、宣戦、講和の権能を中央政府に委ねているからだという見解も成り立つてであらう。南北戦争の例もある通りで、各州に宣戦、講和等の権能があるなれば、その後に於いても戦争が繰り返されていたかも知れない。瑞西スイスの实情も、北米合衆国によく似ているが、ともかく、戦乱の渦中にあつて、新しい平和機構に関する研究が続けられていることは注目すべきであらう。国際聯盟が事実上信頼を失い、形骸視されるに至つたのは、この各国主権の一部を持ち得なかつたからだと見る向きもあるようだ。勿論、この欧州聯邦案が、直ちに実現するものとは思われないが、平和維持の理想案として検討されている点を見逃すわけには行かない。また中には取り敢えずバルカンだけで、試みとしてこの聯邦案を実施して見てはと説く者もある。嘗つて国際聯盟創設の提案がなされた時、我が国のそれに対する準備、予備知識等が充分であるとは言い得なかつた。率直に言えば突然の提案の如く驚いた向きもあつたのである。戦争自体の勝敗も勿論注目

すべきであるが、その後に来るものに対する心構えを充分にして置く必要が、今後の国際情勢に処する上に於いて痛感されるのである。この意味から欧州聯邦案の如きも、単なる理想に過ぎないと軽く見逃すべきではあるまいと考える。我が国に於いても、識者がかかる問題に就いて考究して居るとすれば、それは非常に結構なことだと思う。また平和維持の方法として植民地資源の共同利用というようなことも考えられているようだ。これは嘗つて英国のホーア外相がゼネヴァ【ジュネーブ】に於いて提議したことがあり、国際聯盟に委員会が設けられたのであるが、今度の戦乱に依つて中絶してしまつてゐる。英、米あたりでこの問題も頻りに検討されて居るようであるが、聯邦案と共に一応は検討すべきものだと思はれる。来るべき欧州戦後の事態は、当然東亜の事態に対して直接、間接の影響を持つものであるから、あらゆる場合に処して遺憾なきよう、今から相当の準備をなすことが肝要である。対岸の火災視して居ると置去りにされるようなことがないとも限らない。

二

第一次大戦当時、私は暫らく和蘭公使として駐劄していたことがあるが、当時の和蘭は地理的に独逸の侵攻を受ける惧れはなかつたのであるが、通商方面では相当の打撃を受けていた。今度

は一時独逸の進攻説に脅かされていたようであるが、繰り返すまでもなく、中立国の困窮というものは想像以上のものがある。戦争という異常状態の際は、それでも泣き寝入りしなければならぬのかも知れないが、それだけに外交上の折衝、手段は非常に慎重を要し、機宜を得たものたることを要する。また中立国の向背が参戦国にとつて大きな関聯を持つことになるのである。利害得失を離れて外交というものはないわけであるから、独ソの協定の如きも勿論この線に沿うて為されたものに相違ない。しかしこれが嘗つての日英同盟の如き鞏固なものであるか、どうか確言し難い。独ソの離反を策しているものがあつたり、またそれが事実となつて現れるのではないかと観測している向きもあるらしいが、とにかくソ聯の外交政策が、ポーランド波蘭分割、フィンランド芬蘭進攻によつてその正体を露呈したことは事実であろう。バルチック沿岸の勢力分布を繞つて独ソがいかなる手を打つか予断することは難かしいが、常に且つ恒久的利害が一致するか否かの点に関しては、一抹の疑問がないとは言えない。

国際情勢を見るためには、公平なる視野を持つことが肝要である。私は外務大臣在任中、二度ばかり議會に於いて、今後の外交政策は何れにも偏せず日本独自の立場から進められなければならないことを強調したのであるが、何れかの国に依存するとか、殊更に偏するの態度は、視野を狭めることにもなり、それを歪曲することにもなるのだ。協調ということは必要であるが、一方

にのみ偏しては自らを失うようなことがないとも限らない。このところを充分戒心しなければならぬと思う。この意味から言つて、無責任な外交批評とか、思いつきの外交論等は充分慎むべきであろう。不用意な論策が屢々無用の刺戟を相手に与えて、事態を面倒にした例は過去に於いていくらかも見出される。国民一般の間に外交に対する関心が高まつて来ていることは、結構であるが、それだけに、識者は慎重な用意の下に論をなすべきであろう。

和蘭等オランダに於いても、蘭領印度を持つてゐるだけに、日本の輿論には異常な注意を払い、必要以上の刺戟を受けていた時代もある。私の実際に経験した例もあるわけであるが、海外発展ということに關聯して考慮を要する点は、相手に対して無用の刺戟を与えない用意を持つべきであると思ふ。また和蘭のある地方の婦人の如きは、その服裝に於いて欧州の流行を追わず、昔のままのそれを墨守している。これは何でもないのであるが、その国民性の特色を表現しているものに外ならない。フィンランド芬蘭にあつても、体育方面に於いては特にすぐれたものを有している。斯様に所謂小国の中にも、それぞれ我々が示唆を受くべき特性が見出されるのである。英米独仏その他の大国の国情とか、国民性というものは相當に判つてゐるだろうが、ともすれば小国の方は閑却それ勝ちである。親蘭、親芬という日本人がいても、よさそうなものだと思うが、そういう心掛けの人は少ない。

外国人の中には、実に熱心な親日家というのが見受けられた。小泉八雲の作品によって日本が好きになり、好き好きでたまらぬという米国婦人のいたことを記憶している。斯様の例は一々あげて行けば、かなりにあるだろう。ここで文芸作品の国際的な影響の重大さが感得されるのであるが、本当の日本の姿をもっとよく海外に知らせることも忘れてはなるまい。

三

さきの大戦当時、私は和蘭から船で英国に渡ったが、英国の海岸近くに同国の艦艇に率いられた漁船が並列しているのを望見した。聞くところによると、これは独逸の艦船を見張っているのだということであつたが、自国防衛のために懸命になつていたことが、これだけでも充分知られたのである。そして、この見張りをやっている水夫たちは、僅かの手当で、挺身危険なる任務についていたのだが、これは打算とか一身の利害を離れて、自国に尽す決心がなくては、とてもやれるものではないと感じた。愈々危急に処するとなると、伝統的な海国の意気を示すものだとも感じた。今度の場合にはどういう方法を用いているか、よく判らないが、英独海軍による通商破壊戦が鎬^{しのぎ}を削っていることは観察するに難くない。然らばこういう状態が、いつまで続くかとい

うことになるが、それは今直ちに予測し得られる事柄ではない。殊に私としては情報を得ているわけではなく、たゞ新聞等に依るだけであるから、尚更困難である。米国が調停の労をとるかどうか、それも判らないが、仮りに米国が舞台に乗り出すとしても、それは大統領選挙が終つてからのことであろう。ウエルズ國務次官の渡欧は、いろいろ取沙汰されたが、これは現地の情勢を見るためであつたに相違ない。各国の意向を打診して、何らかの工作の準備行動であるとは断ぜられない節もある。ともあれ渡欧の收穫はあつたものと想像されるが……。斯様に客觀的情勢を見て行くと、戦は相当長引くという結論が出そうである。けれども、動いているものだから、今後どういふ場面が現れるかも測り難い。その場面に処して、狼狽しないだけの構えを備えて置くのが、最も賢明である。經濟上にも、思想上にも、變動があるに違いないからだ。

対ソ国交調整は非常に大きな問題であるが、これは早急に懸案解決とまで進みそうにもない。国境劃定、通商問題、漁業問題、何れも晴れ晴れしくない。外交というものは相手の氣持をよく呑み込んで、それも把握して進まなくてはならぬ。或るロシア人の書いたものに依ると、ソ聯が北鉄讓渡をなした時が日ソ兩國接近の好機會だったことを指摘している。ソ聯が讓歩して買収に応じたのであるから、その氣持を日本としても充分に汲み取つて、新しい一步を踏み出すべきであつたという意味のことを述べているのであるが、たしかにあの時は好機會であつたかも知れな

い。そう言ったチャンスを鋭く掴むことが第一に必要であろう。外交の妙味はそう言ったところにあるのではなからうか。

またソ聯に対して仇敵の如き言辞を弄する向きもあるようだが、これは結局相手の感情を無用に刺戟する以外に役立たない。防共は勿論徹底しなければならぬが、国交調整の意思があるならば、何も彼も一概に仇の如く言いけなすことは避くべきであろう。殊に新聞などで煽動的な語句を掲げるのは、不用意と言うべきであろう。こうしたところに我々の平素心すべき点が多々ありはしないか……そんな気がしてならない。要するに、ソ聯に限らず何れも相手のあることだから、調子外れの挙措は努めて慎しむことが第一である。つまらない摩擦や刺戟は、出来るだけ避けるようにすることが賢明である。この意味の心の訓練が大切である。

四

外務省顧問として数多もの功績を残したデニソン氏が米国へ帰る時、私は偶然同行したことがある。出発前の慌しい際に私は同氏を訪ねたところ、氏は書類等を取り片付けていた。その中に一束の草稿があつたので、それは何ですかと聞くと、日露戦争前に露国へ送った最後通牒文の下書きであるとのことであつた。そこで、私は草稿をめくって見たのであるが、何枚も何枚も、実

に驚くほど多くの書き直しが束ねられてあつたのである。一通の文書を発するのに、かくも多くの草稿が書き直し、書き改められているを見て驚かざるを得なかつた。では、何故斯様な努力が重ねられたかに就いて、同氏の語るところを聞くと、次のような尊い努力が秘められていたのだ。それは『小村外相から露国へ発する通牒文の草稿作成を依頼されたのであるが、何枚書いても思うように出来ない。うまく書けない。そこで小村外相のところへ行つて、露国に対する肚を聞いたところ愈々となればやるということが看取されたので、私は言葉を尽し而かも極めて鄭重な文章を書いた。戦争をする肚でいるのに、何故鄭重な通牒文を書いたかと言うと、それは開戦ともなれば当然通牒文は全世界に公表されるに違いない。その場合に、日本はこれだけ言葉を尽して、その上謙虚な態度を以て通牒を発している。にも拘らず露国が応ぜず開戦となつたのだという印象を、強く列国の人々の頭の中に烙^やき込むことが出来る。それだけ日本の立場が有利であろう……と考へて殊更に強硬な字句を用いなかつたのである。これがもし逆で日本に戦う肚が決つていないとすれば、通牒文は強硬な字句を連ねてもよかつたのだが……』とのことであつた。

私は氏の述懐を聞いて、外交にはこの心構えが何よりも大事であると痛感したことであつた。通牒文の字句位と軽く考へる向きがあるかも知れないが、こうした点に細心の注意を払い、少しでも自国を有利な立場に置くということが大事なのである。デニソン氏のこの配慮には自ら頭の

下るのを覚えた。それ程努力されたものならば、この草稿は得難い外交資料であるから、記念に残して呉れるわけにはゆかないだろうか、私は懇願したのであるが、氏は、『どれ、どれ……』と言いながら、その草稿を私の手から受けて、そのまま傍のストーブの中へ投じてしまった。咄嗟の間のこととて、私は呆氣にとられて、どうして又それを焼くのですかと聞いたところ、氏は『露戦争当時の外交上の功績は、すべて小村外相の手腕によるものだ。勿論この草稿を君に呈することはいと易いが、その意味から言っても後代に残すべき書類ではない。だから火中したのだ。』と説明するのであった。私は氏の高潔なる心事に触れて、改めて頭の下がる思いを加えたことであつた。国籍の如何を問わず、デニソン氏の如き心構えの人は心から尊敬するに足るものだと思ふ。深く感じ入った次第である。この話は所謂外交の裏面話ではあるが、外交とはこうしたものであるということ教える尊い挿話だと思ふ。

五

私が日本の外交史というようなものを編纂しているとか、書いているとかいうようなことが、伝えられたことがあるが、私は別に纏つたものを書いていないわけではない。勿論、正しい日本の

三 幣原喜重郎著『外交五十年』1951年読売新聞社刊、2007中公文庫。

外交史が出ることは、喜ばしいことであるが、それはなかなか大事業であつて、とても一個人の努力で成し遂げられるものではない。たゞ、私が直接事に當つて、折衝したり、話し合つた事柄を、折に触れて記録しているが、これは秘録とでもいふべきもので、相手方と私だけしか知らない事柄もあり、従つて公表を遠慮すべき性質のものが多いのである。外務省の方へは時々それを提供しているが『成程、こんなこともあつたのか』というような事柄もあるようだ。何れにしてもある事柄の真相を把握するということは、容易ではない筈である。皮相な見解とか生半可な知識を以つて、軽々しく物事を批判することは、危険至極である。ともすれば、そう言つた批判が行われているのが眼につくこともあるが、これはすべての人々が心すべき事だと思われる。

世界的な變動の現代に棹さして行くには、上^{すべ}りな態度であつては、溺れてしまふ虞れがないとも限らない。外交は一種の生きものであり、またその時代、時代を離れて存在するものでもない。故に、外交評論などはその時代の流れというものとの関聯を洞察して、冷静になさるべきではないかと思うのである。慌ててはいけない。好まざるものに対して耳を蔽い、眼をふさいではない。

日米関係変遷史 【『中央公論』1941.11号】

米國極東政策の非現実性

清沢 洌

一

それまで日本を支持後援して来た米國が、却つてこれに恐怖を感じ出したのは、日清戦争において支那の弱体振りが明らかにになり、越えて米國が、布哇・比律賓^{ハワイ・フィリピン}を併合してからである。持つ者は、持つことの故に不安を有する。

開國以来、米國の日本に与えた援助は、莫大であつた。米國はその極東政策において、下関砲撃当時の如く列國と共同政策をとつたこともあり、またハリス (Townsend Harris) やビンガム (John A. Bingham) 時代の如く独行政策をとつたこともあるが、その終局の目的としては『強い東洋』を欲したことは疑えない。これがために日本の希望した不平等条約改正についても、可能範圍にこれを容認する態度をとり、明治六年八月六日にワシントンで署名された日米郵便交換条約 (Postal Convention between the Empire of Japan and the United States of America) は、日本が西洋強國から平等交渉権を認められた最初の条約であつた。最惠国條款を含んでいる關係から、実施するには至らなかつたけれども、明治十一年 (一八七八年) には既に、米國は日本の關稅自主權

を認めるところの条約に調印し、翌年四月八日には同書を交換したのである。

この米国の態度は、しかしながら単なる正義感からのみ出発していると観ることはもとより困難だ。米国は自国の膨脹と発展に当って、その使用したる方法は正義と人道ばかりではなかった。バートランド・ラッセル (Bertrand Russell) もいったように各国家の対外政策は、本質的に相違のあるものではなしに、多分に境遇と事情の産物だ。米国の初期の対東洋政策は確かに進歩と自由の味方であることは事実で、そのことは一八七二年に国務長官フィッシュ (Hamilton Fish) が、対日公使デ・ロング (Charles E. De Long) に与えた訓令において『日本をして、出来るだけ支那の排外政策から離れしめ、その列国との自由商業及び社会的交際の進歩政策を採用せしめるべく努力せよ』といった言葉に現われている。だが、この政策すらも実は、太平洋になお足場を持たない米国が、自国の通商主義を守るためだと観るべきだ。

米国が東洋におけるその無私公平を誇っていた時に、日本側では、既にそれをその額面通りに受取るべからざるを指摘する者が少くなかった。即ちタウンセンド・ハリスが、外国代表者として一八五七年十二月、最初に將軍に謁見し、引続いて堀田閣老以下と会見し、日本がその鎖国政策を放棄せねばならぬことを勧め、合衆国はアジアに領土的野心なきことを説明し、その例として、台湾及びサンドウィッチ島を合併することを拒絶したことを挙げたのであるが、これを聞

いた後において海防掛一同は連名を以て、米国は武力を動かしたことなしというが、メキシコと干戈^{かんか}を交えて国境を改訂し、またペリー (Mathew Calbraith Perry) 提督が神奈川に来た時も干戈に訴える決意があり、更に帰路琉球国と、押して条約を取結んだのも異図ある証拠だと幕府に申入れた。また竹内下野守は『伊西波爾亜領^{イセボロア}キュバ島と申す』島について米国が戦争するかも知れぬ旨を説いて、ハリスの言の全面的に信ずべからざる旨を進言した。

その動機が何であれ、米国がその布哇、比律賓を領有するに至るまで、日本に好意を示したことは即ち事実であつた。

二

米国がアラスカを買収したのは一八六七年（慶応三年）であつて、日本がなオペリー来航の余波を食つて、過渡期の嵐の中に立つていた時であつた。その当事者シュワード (William Henry Seward) 國務長官の言葉を以ていえば、それは『アジアに対する友情的握手の差しのべ』のためであるが、ペリーの日本訪問と共に米国が漸く極東に対する深甚なる関心を示すものであつた。

しかし、米国が極東に対し積極的な熱意を持つに至つたのは前にいつた通り第一歩としては布哇併合であり、第二歩としては比律賓の併合である。これによつて米国は完全なる太平洋国とな

つたのだ。

米国が布哇を併合した。一八九八年（明治三十一年）には、日本は既に日清戦争に勝ち、償金約三億六千万円を得て国内産業の急速なる発達を助長し得たと同時に、台湾をその版図となすことが出来た。その当時、世界に漲つた帝国主義的風潮の誘惑に抗することが出来ずに、まず布哇合併に手を染めた米国は、この時始めて日本と衝突する機会に会した。米国にとつての太平洋は、家庭的な重要性であるのに対し、日本にとつてのそれは生死の問題であつた。

米国が布哇併合の計画あるを知るや、一八九七年（明治三十年）外相大隈重信は米国政府に対し抗議を提出した。当時の日本公使は、後に暗殺されたる剛愎を以て鳴つた星亨であつた。その抗議は三つの理由からなつていた。

第一、布哇における現状維持は太平洋に權益を有する列強の善良なる諒解に必須であること

第二、布哇の併合は条約及び同国の憲法によつて取得せるところの在留日本人の住居、商業及び産業の權利に危険を及ぼす恐れあること

第三、布哇の併合は条約によつて日本に有利に現存する權利義務に関する解決に遅延を來たすであらうこと

この抗議の内容は不思議にも、現在米国が日本に対して使用している主張の内容に酷似する

ものであるのは注意を要する。もし現在、米国の主張する現状維持主義が正しいならば、同じ理由によってこの日本の対米抗議を否認することは到底困難である。布哇は独立国である。その国民は併合を欲しておらぬ。殊に重要なことは当時布哇に在住した人口の約四割（正確にいえば一九〇〇年において三九・七％）は日本人であり、白人種は米国人をもふくめて一八・七％に過ぎなかった事実である。米国の布哇併合を合理化する論拠は、（一）投資額が多かったことと、（二）地理的に近接していることだけである。

大隈は自己の立場の正しいことを信じて疑わなかった。故に星が事態の急迫を説いて、米国に対する抗議と共に窃かに軍艦を布哇に送って、同島を占領すべしとの進言をして来たのに対し、これを一擲して顧みなかった。彼は左様な手段をとれば米国と衝突する危険があるから、それは避けなければならない。と同時に、英、独、仏が何れも布哇とは歴史的関係があるから黙つてはおらず、正しい日本の主張は必ず通ると信じていた。

大隈の観測は、しかし謬つていた。米国はあくまでその近接的地位の故に、布哇を併合することを決意した。その十余年前に、すでに國務長官ブレイン (James G. Blaine) はいった。『布哇諸島は亜細亜組織アジアチック・システムの中に加はせることは出来ない。もしも彼等が独立国たるの立場から離れる場合あらば、それは自然法の運用によりまた政治的必要の運用によつて、必然に帰属することの

アメリカン・システム
米 国 組織の中に同化しかつ帰属しなくてはならぬ』といった。その後の比律賓の併合の時に米
国は『自然法の必要により』とはいはなかった。布哇併合に対して、それまで反対していた上院
議員ホアー (George F. Hoar) が、一転してこれに賛成するに至ったのは、布哇島が日本に併合
される危険ありというのが最も大きな理由だった。

三

布哇の併合に対して抗議した日本政府は、米国が米西戦争の結果、ヒリッピンを割取したに対
してはこれに抗議しなかった。

当時、米国の政治は、商工業者を以て構成分子とする共和党の手に収められ、ローゼヴェルト
及びロッヂ (Herry Cabot Lodge) が弁護したところの所謂 large policy が、漸く国民の耳を捉え
た。最初、メーン号の撃沈に始った時に比律賓等の割取などを想像しなかった米国民は、熱烈な
る帝国主義者たる若い海軍次官シオドラ・ローゼヴェルト (Theodore Roosevelt) の命令によつて、
デューイ (George Dewey) 提督がマニラを攻略するや、比律賓は最早その瞬間から米国のもの
となった。ウィリアム・ホワイト (William Allen White) は書いた。"This is what fate holds for the
chosen people. It is so written it is to be" 一度、兵力を以て占領したる領土を手放すことが、實際間

題として最も困難なることを示す一つの例である。

その時、日本の総理大臣は明治天皇の御親任の最も厚かった伊藤博文であつた。彼は明治三十二年（一八九九年）、米国上院議員ビヴェリッチ（Albert J. Beveridge）が東京を訪問するやこれに語つて、米国が比律賓を保持するを認め、『この問題には米国の国威が関係する。またそれは単に一時の問題ではなしに、将来における米国の利害に關すること非常に大である。もし米国がこれを処分しなければ、他の列強が直ちにこれを取るべく、さすれば世界は恐らくは戦争に捲き込まれるであらう』といった。伊藤はまた比律賓の閩将アギナルド（Emilio Aguinaldo）に対米媾和の賢なることを勧めたのである。

日本が米国の比島領有を認めたことを以て平常なる状態において、日本が米国に対しその帝国主義の延長を東亜に招請したと観るべきではない。前述の如く世界は折しも帝国主義の悪疫にかかり、ドイツは南洋において足場を求めんとし、ロシアも比律賓の何れかに海軍根拠地を希望していると伝えられた。故に日本としても、英国としても、他の欧州諸国の手に比島が落ちるよりもと考へたに過ぎぬのであつた。

更にまた日本としては日清戦争後、三国干渉のことあり、ロシアの野心は事々に現われて朝鮮を中心に問題は漸く緊張せんとする時であつた。北に対して備えるに當つては、南方はせめては

好意国によつて固めらるる必要があつた。日本自ら南方勢力の中心に坐する実力あらば別として、その力がなお欠如している以上は、比較の問題として米国はなお最も無害のものとされたのである。況んや比律賓の争奪に始めて、当時のアフリカに觀る如き割讓運動ス克蘭プルが始まれば、日清戦争直後の我国に影響するところ大なりとも考えられたのであつた。このことは米国としても同じであつて、米国は布哇問題についても觀うる如く、日本が太平洋の奥深く入り來たることには危惧を感じたが、日清、日露の兩戦役に対する態度に見ても、露国やドイツが亜細亞大陸に根拠地を得るよりも、日本がそこに足場を得ることを望ましいとしたのである。それがその頃の日米關係であつた。

四

比律賓を自己の領土とすることにより亜細亞帝国となつた米国は、次に目指すのは支那の市場である。比律賓島を領土としたことに對しては、その最大なる責任者であるローゼヴェルト自身が結果に失望して、何等か名譽ある口実あらばこれを放擲したいと考えた。米国としてこれ以上に支那の領土的野心に突入することは、國民輿論が承知しない。従つて支那に對する政策は、遙かに消極的ならざるを得ない。この目的に添うために案出されたのが門戶開放主義である。

當時米國としては三つのとるべき方法があつた。第一は支那分割運動に自ら入ることである。第二には英國と緊密に提携して、ロシア、ドイツ、仏國に対抗して支那分割を喰ひ止めることである。第三は米國独自の行動をなすことである。第一の支那分割運動に自ら入ることは、マッキンレー (William McKinley) 大統領は機会あらばこれを厭わない意があつたが、前述の如く國民の感情が許さない。第二の英米提携も反対がある。そこで第三の方法が選ばれたのであるが、この門戸開放主義の目的は (一) 米國通商の公平待遇を擁護して、支那市場の開放を計ると同時に (二) その頃、日清戦争において無力を表白した支那において領土分割の勢いが露骨になつて来たので、これを押えるためであつた。そして、その標的は第一には露國であり、第二にはドイツであつた。これらの國の支那侵略に対し、同じ憂えを有する日本と英國は、この米國の門戸開放主義を支持した。

門戸開放主義は原則的には、その条項が示すように通商保護主義である。米國の利益にさへ妨害を加えられなければ、各國の特殊勢力圏の設定を承認する建前であり、現に既存する勢力圏に対し米國は何等抗議の意を表さなかつた。だが既に特殊勢力圏の設定を許しながら、門戸開放即ち商業上の機会均等を主張するのは、それ自身矛盾といわねばならぬ。何故なれば特殊勢力圏を列強が得んとする所以は、その領土に鐵道、鉦山、港灣その他の独占的權益を得んがためであつ

て、そこから経済的特殊利益を得ることは当然の論理的結論であるからだ。

そこで米国は一步を進める必要がある。翌一九〇〇年（明治三十三年）七月、支那に義和団事件勃発するや、米国は更に前年の原則に附加して『支那の領土的及び行政的実体』（Territorial and administrative entity）を保持し、かくて『世界に対し支那帝国の全地方との平等にして偏頗なき通商を行う原則』を確立せんとするに至った。その時から『門戸開放』は『領土保全』と並び称せられるに至った。

こうなれば米国は自己の通商擁護から出発して、支那の領土保全の保護者にまで進まねばならぬわけである。しかも米国は少くとも東亜においては、その領土保全を実行するだけの實力はなく、またそれを行使する意志もない。従つてその政策は自然に、優勢なる勢力を覆す劣勢勢力を、道德的かつ實質的に援助することにならざるを得ない。これが露国という侵略勢力と日本というなお大陸に足場を有さない勢力が争う場合に、日本を助けた理由である。即ち米国の極東政策は本質的に均衡政策であつて、英国の欧州大陸に対するそれと種類を同じくする。

しかし米国の極東均衡政策が、英国の欧州大陸の均衡政策に比して有する弱点は、米国の主張する『支那の行政的実体』というものがなお實在しないことであつた。米国はこの實在しないもののために、露国が強くなれば露国を、日本が強くなれば日本を、その抑圧の対象とするのであ

る。この米国の非現実的なる政策は、東亜にその期待する平和と衡平を齎さないで、却つて混乱と不安を持ち来した。

五

この米国の極東における均衡政策を最も積極的に現わしたのが、米国の日露戦争に対する態度であつた。この戦争において米国の日本に対する道徳的援助と声援は全的であつた。この点において日本は、もとより当時の米国に感謝すべき理由を持つてゐる。

しかし、米国の日本に対する好意は、必ずしも日本そのものに対する愛情からではなかつた。大統領シオドア・ローゼヴェルトは、高平公使に対し戯談口に『予はまるで日本の外務省の役人のようだ』と語つたほど、熱烈に日本を支持したのであるが、それは日本が露国という敵——南進して米国の門戸開放、領土保全主義を無視する国を敵として戦うが故に、自己の戦いを戦うものとして好意を表したのである。故に彼は日本側に立つて、露国に媾和を勧めてゐる時、既に、露国が画面から消え去るほど無力化するを懼れた。これについて米人の一歴史家のいうところが示唆的である。

『ローゼヴェルトは現実主義者として、支那政治の一要素としての露国が脱し去る結果、日本

自身が、何等牽制されるところなければ米国の利益に危険となるであろうことを予見した。そこで彼は一九〇五年以後、露国と日本とが相互の行動が相牽制することを望んだ』

この米国の希望が實際問題としては実現せず、米国の満鉄中立化その他の提案に対し、却つて日露両国が提携し、四回に亙る協約を経て世界大戦前まで緊密なる関係を維持したのは、日本側としては外相小村寿太郎の遠大なる外交政策によるところが多かつたのである。ローゼヴェルトは最初には日、露両国が相牽制することを望み、次ぎには英、独両国が米国に協力することを望み、最後には一九〇七年から一九〇九年二月にかけて米国大艦隊を世界一周の旅程に上らせた。その目的はいうまでもなく日本であつた。当時、ローゼヴェルトは『彼等は俺が彼等を恐れていると思つてゐる』(They thought I was afraid of them) から、今こそ決意を示す時 (Time for a show-down) だと頑張つて決行したのであるが、これを知らざる真似して大歓迎した日本は、そのタクチックにおいて、この南米猛獣狩の政治家よりも優れていたであらう。近頃はこの肚芸が、世界を通して少くなつた。

一方、日本の發展は最早必然の運命を辿つていた。日本は過去十ヶ年に日清、日露の二回の大戦争を経た。それは真に国家の運命をかけたものであつて、米国の西班牙戦争などは質を異にするものであつた。その米西戦争の結果、『神の見える手』(The unseen hands of God) によつ

て比律賓を割取し、亜細亞帝国となつたのであれば、日本が同じ手に導かれなければならないわけではない。大統領マッキンレーが比島割譲に關しパリに在る米國全權に送つた言葉が適切である。『事件の進行は人間の行動を支配し、また圧倒する』(The march of events rules and overrules human actions.)。

殊に日本は三百年の徳川鎖國時代によつて、國際植民地戦争には全く参加することが出来なかつた。否、その被蚕食國の一環として世界に出現したのである。その俚の事態で満足することが出来るかどうかは、偏えにその國民の性格による。日本の國民はそうではない。日本人の過去の伝統と訓練は一つの國民が單に『時』の偶然から、永遠にその与えられたる空間と位置に満足していねばならぬことを信ずるに適していない。

六

米國の極東政策である門戸開放主義の致命的欠陥は、それが劃一的、機械的であることである。我等は既に米國の政策が、行政的実体のないところに行政的実体を取返さんとすることの矛盾を指摘した。一九一九年のパリ會議には支那全權は中央政權から出すことが出来ずに、南北兩地方政權から各別々に代表者を送つたし、一九二二年のワシントン會議當時も中央政府は崩壊して、外債は払いえず、行政權は実在しなかつたが、それにも拘らず、そこへ山東省の權益を還付し、

また、関税自主権、自治権を与えることが、東洋平和のためなりと米国は信じ、かつこれをその力において実行したのである。更に米国はシベリアが、その最も攻撃するボルシェヴィズムの手に落ち、かつまた当時においては無政府状態である事実を知りながら、しかも日本によつて秩序を維持することを恐れた。

いま一つの事実は、その対手とする国に対して無差別なことである。米国の門戸開放主義にとつては、どの国であつても支那において特殊勢力圏を設定するものは、米国の正面の対手である。それが米国がウィルソン時代において、四国借款団交渉で日本の満州における權益を承認せず、総ゆる特権を提供せしめんとした立場である。しかしかかる立場は事実に支持出来るであらうか。仮にここに日本、米国、露国、ドイツ、英国というような国を引例しよう。露国という世界の七分の一強の領土を有する欧州国が、満州、朝鮮、北支にその特殊權益を設けることと、日本という純粹なる亜細亜国が、そのことをなすことは同様に見るべきであらうか。更にまたモンロー主義によつて両米大陸に特殊位置を持つ米国が、亜細亜において他と全く均等なる位置を獲得する理拠はどこにあるであらうか。

日本は日清、日露の両戦役に勝つて、米国の不興に拘らず生きて行かねばならぬ。それには三つの方法がある。(一) 移民を送り出すか、(二) 商業を拡大するか、(三) 植民地を獲得するか

である。これは、順序の問題はその国の事情によるとして、欧米諸列国が何れも、ある歴史の段階に実行したものである。

日本の如く植民地獲得競争に参加出来なかつた国としては、その膨脹の疏通口として移民の流出を第一段階とするのは当然である。何故ならば商業的發展の段階は、産業生産の關係から、どうせ少し遅れるからである。ところがこの移民流出に對し、最も強く反對したのは米國である。米國の日本移民排斥は布哇からの日本移民転航當時（明治三十一年）から起つたが、一九〇六年（明治三十九年）にはサンフランシスコにおける日本人兒童の隔離問題となり、翌一九〇七年（明治四十年）には日米兩國政府の間に所謂紳士協定が成立し、日本は自發的に米國への移民を制限し、かつ布哇よりの転航を禁止することにしたのである。

この協定を日本はよく守つた。このことは歴代の米國政府が認めるところだ。しかもそれに拘らず、米國議會は国内法律を以て、一九二四年一方向的に排日移民法を制定してしまつた。日本政府はそれまでも、この問題については総ゆる米國の意志を容るる用意あるをいい、そのために幣原・モリス案 (Morris-Shidehara drafts) なるものも出来あがつたほどである。この排日法の通過はワシントン會議において、日本が太平洋における米國の秩序案を受諾し、劣勢なる海軍比率、門戶開放主義の條約化を承認した後においてであり、また関東において大地震があつて、日本の

国力が低下したと観られた時であつた。日本の移民問題は、世界歴史において類例のない侮辱的な方法において、その企図挫折せしめられた。

第二は通商問題である。移民の疏通口を失つて日本は通商貿易の一本に頼らざるを得ない。日本と米国との貿易関係は一九一一年の通商航海条約のうちに規定された条件付最恵国條款を基調とするものであつたが、この問題の研究者エッセル・B・デイトリック【Ethel B. Dietrich】博士もいう如く、日本が製造品の輸出国として立ち現れた時は、すでに米国市場は高関税の障壁を以て保護されており、日本はアメリカの貿易統制の圧迫を蒙つたのである。そこで日本としては已むを得ず、生糸という如き利率の少い無税品を以て、この世界において最も豊富なる市場との取引の大宗とせざるを得なかつた。

しかも世界に経済恐慌が来るや、一九三〇年米国はそのホウリー・スムート関税法第三百三十六章を発効して日本商品を圧迫した。この関税法は『生産費の平均化』と呼ばれるもので、関税率を国内生産費と海外生産費と平均化せしめるために、大統領が現在の税率の五〇%方上げ下げしたり、類別を変更しうる権能を与えらるるものである。生糸の値段は一九三〇年以後四ヶ年間に半額となつた上に、この商業的圧迫が日本に及ぼす影響はいわずして明らかなるものがあつた。

七

以上、我等は日本が近代国家として生存することに必要なる移民と、商業との二つが、少くとも米国の関する限り、正面から反対に会した事実を観た。米国の実力が、なお植民地的存在である間は、この反対は大して顧るに当たらないが、それが太平洋国として重大なる発言権を有して、英帝国その他をリードする地位を持つにいたつて、その影響は極めて大である。

移民と商業との二つを、その最も自然なる出口から遮断或は妨害されて、日本は如何にして生存し得るか。日本の眼は自然に、東に望みを断つて、西に向つた。西というのは亜細亞大陸のことである。このことは布哇の併合に抗議した日本が、比律賓の併合には、寧ろ積極的に協力したことでも明らかだ。

一時、米国は日本が亜細亞大陸に發展することについては必ずしも異議がないかに見えた。日露戦争当時、桂首相と米国陸軍長官タフト (William Howard Taft) との間には秘密協定を結んで、(一九〇五年八月二十九日) 朝鮮に対する日本の実主権を認める代りに、日本が比律賓に対する侵略的意図を有さないことを確言したのであった。日本としては、もし西において日本が發展する機会を与えられれば、それは伝統的にも、歴史的にも望むところであつて、東において幾つの太平洋現状維持の約束が造らるるも厭うところではない筈だった。

しかし米国の日本利用は露国を満州から追い出だす間に限られていた。その任務がすめば日本に対して用はなかった。第一次世界大戦の末期に当って、帝政露西亜に革命が起り、西比利亜が混乱化するや、聯合國がこれに出兵することの提議は、まず英仏両国からなされたのであるが、米欧の共同出兵は明らかに日本牽制のためであつた。英仏両国は日本をして、場合によつては西比利亜を経営せしむることに、必ずしも異議はなかつた。米国のみが日本の派遣兵の多寡、撤兵時期等に焦慮干渉した。米国はその門戸開放領土保全主義を西比利亜に延長したのである。

一九一九年のヴェルサイユ會議においては、米国の意図は必ずしも成功しなかつた。日本は戦争中において赤道以北の南洋諸島、山東省におけるドイツ旧權益の譲渡等を、聯合國の一員として關係諸国との間に話しあつておつたので、その位置は極めて強固であつた。米國媾和委員は故國の輿論を背景に、山東省を直ちに支那に還附することに努力したのであるが、その希望は達せられなかつた。ウィルソン失脚の理由の中には、この問題がある。

一九二二年のワシントン會議において米國の極東体制の概念が、条約化されたことは前述した通りである。米國は門戸開放主義聲明以來、二十三年目にして始めてこれを条約化しえたのである。これは確かに米國外交の勝利であつた。しかしそのことは必ずしも日本の外交的敗北を意味するものではなかつた。そこに將來の問題を孕んでいた。

八

日本はワシントン會議において米国の極東秩序組織を受諾した。それと同時に、また海軍においては英米に対し、五・五・三の比率を受諾した。

このことが何を語るかは明らかだ。米国は日本をして、その体制を受諾せしむるに成功したけれども、仮にもこれが実行されなかった場合には、これを強制する如何なる方法もないのである。ある米国歴史家が “When the American people are asked to put up shut up, they do neither” といったのは、そこには意志があつて、方法がないことを示すものに外ならない。換言すれば米国は方法と実力さえあれば、その政策のために put up することを避くるものではないが、その実力なき以上——亜細亞大陸においては——その体制の保持は日本の好意に頼らざるを得ず、最後の切札には shut up するのやむを得ざるに結果したのである。

契約の履行は、契約の当事者が、それを履行し得べき事情に在つて可能である。そして条約は契約である。日本はワシントン条約締結されて以後の約十ヶ年、如何なる国もその条約違反を以て指摘することが出来ぬだけの、最も忠実なる条約遵奉者であつた。幣原外交はこの期間を代表する日本外交の別名であつて、それはステイムソン氏すらもその昔『極東の危機』(The Far

Eastern Crisis; Recollections and Observations) に公言して最も敬意と信任を払った外交である。だが、この契約を忠実に履行しうる限度は、自ら生存しうる範囲においてである。前にも述べたように日本は移民の禁絶に会して、これに抗議したのは事実であるが、早くもこれに思いを断った。あきらめは日本人が、仏教訓練によって受けた性格的特徴の一つである。日本はその後、偏に商業立国の途を辿った。しかもその通商貿易は、一方において日本の輸出する原料の未曾有の暴落と共に、他方においてこれを補い得る唯一の方法である製造品の輸出に対する禁止的関税障壁の引上げに会したのである。日本は如何にして生存し得るか。

水は低きに向って流れる。それは抵抗力の少い方向である。日本は今一度、大陸に向わざるを得なかった。満州事変以来の日本の行動の是非に対する批判は、まず一国とその国民は生存する権利があるかどうかから始められなくてはならぬ。この根本問題に対する回答が得られれば、筆者はその後に起った諸種の個々の事件について弁護する意志は毛頭ない。

一八九八年にマハン (Alfred Thayer Mahan) は米国が欧州に干渉主義をとることは、極東において協力することと一致するといった。協力とは普通の字義を以ていえば干渉である。米コーペレーション国が極東に実力を以て干渉し得なかったのは、比律賓と布哇とだけではどうすることも出来なかったからであって、今や第二次欧州大戦の結果、シンガポールの基地を得、その上に英帝国の協

力を獲得しうることになった。米国の道義的干渉が、実力的干渉に進むのは自然である。米国は大西洋において英国を援助する代りに、太平洋において英国の援助を得て、その伝統的太平洋政策を行い得るのである。表面に現われるところとは反対に、米国にとっては太平洋が主であつて、大西洋は客だ。

最後に我等は米国に聞きたいと思う。米国の期待する門戸開放主義と、その太平洋秩序において日本の占むべき位置は何処か。米国は嘗て建設的に日本の生存する道を考えたことがあるかと。これなくして米国は、日本を庄迫することが出来るであろうが、日本人を説得させることは出来ない。
コンダインズ

支那事變と列強の動向

清沢洌

事變勃發以來我國の態度は常に不拡大主義を執つて來たが、それが拡大して長期戦になつた。その理由は蒋介石の不明にある。と同時に日本の態度は不拡大主義であつたに拘わらず、日本の執つた政策は次のように、全くそれと反対であつた。

第一に日本は事變が始まると、第三国の調停を排することを明らかにしたが、戦争を収拾するには第三国の調停によることが最も楽な方法である。日露戦争の時でも、開戦の廟議決定するや、即日伊藤博文公は金子堅太郎氏を招き、アメリカを説いて媾和の調停をさせるべく工作することを経た。現在でも、ヒットラーやムッソリーニは強いことを宣言するけれども同時に第三国の調停を期待しながら外交をやっている。

第二に日本の打つた手は蒋介石を対手にせずという声明である。これは蒋介石が倒れるまで交戦状態を続けるということなのだから事變は当然長引く。

第三は蔣介石を相手にしない結果、日本は支那に新政府の樹立を期待することになった。が新政府が成長するまでには当然相当な年月を要する。

第四に、国民が早く事変を片付けることを望まない。例えば宇垣前外相がクレイギー大使と交渉を始めると、早くも媚態だとか軟弱外交だとか非難する。これでは問題は早く片付かない。こうしたことの底には、武力のみが問題を解決するのだという考え方が流れている。それは、武力を背景にした外交で解決するという考え方と反対のものである。

こうして長期戦となり、長期建設ということとなる結果、自然これに対応する政策、機関が生れざるを得ない。興亜院の設立、九ヶ国条約及び門戸解放【開放】を認めない有田外交の出現——が長期建設に対応する機関及び政策である。日本が門戸開放を否定したことに対し、英米では過去に得た英米の権益を日本が武力を以て全部追出すに違いないと考えて、英、米、仏の三国の先般の対日通牒となった。またこれらの国の新聞や雑誌にも、日本がそういう態度で、外交で問題が解決出来ぬならば何等か対抗策を講ずる外ないという風な論説が見受けられる。

ソ聯は暫く措き英、米、仏の対日態度の問題だが、これら三国の日本に対する武力的圧迫という点は大したことないと思う。武力による直接的圧迫などは今日可能であると信じられない。蔣介石を援助することによる間接的圧迫——借款を蔣介石に許すこと——もその効果は大したもの

でなからう。

経済的圧迫は政府の圧迫と民間のボイコットによる圧迫とが考えられるが、前者の効果は大したことないと思う。然し民間のボイコットは、今後相当問題だろう。

事変の收拾に関しては昨年十二月二十二日の近衛声明及びこの声明に呼応するかの如く発せられた汪兆銘の声明が表面に出ている。この近衛声明に基く解決が今後行われる訳だが、如何なる政策を日本が執るにしても、東洋に関する限り日本の態度が殆ど絶対であることは明らかだ。英国の如き実利的な国は日本の態度次第で何時でも話に乗ると言っている。日本は、日本の利益を絶対無比なりとし自主的外交に基き、時に英米を利用して事変の解決に当るべきだ。

【東洋經濟新報 1939.9.9 p900】

自主外交とは何ぞ

清沢 洌

一

阿部内閣【阿部信行内閣 1939.8.30～1940.1.16】は自主独往の外交政策をとるだろうという。結構なことである。だがこゝで問題なのは、自主独往の外交政策とは、内容的にいえば何かだ。

今までとても自主外交は日本の標語であつた。満州事変以来、我等は一日もこの言葉を聞かずに過ごしたことはない。この言葉の下に防共協定は出来、この言葉の故に元来は精神協定に過ぎなかつたものが、政治的重要性に転換して来た。日英会談が事実上、決裂したのもこの言葉の故だつた。日米通商条約の破棄通告も、米国側の不信の事は別論するとして、この政策の派生である。

いま前内閣が、従来の対欧政策を御破算にして、新しき構想のもとに出直すという時に當つて、阿部内閣の諸公が再びその看板にするのはこの文字だ。そもそも自主外交というのは、同じ文字に異なつた意味が盛られているのか、それとも新内閣は従来の方針を、新しく出直すというだけ

で、同じ方向に進むというのか。

それにしても主は代つても、この文字が変らぬところに、日本国民がこの文字に持つ執着と愛好を見ることが出来ようではないか。外国語で何と翻訳するかは知らぬが、こんな文字が一国の民心をとらえること斯くの如く深い国は他にあるまいと思う。

二

『言海』によると自主という文字の意味は、(一) 独立して事を行い他人の干渉イロイを受けず、頼まぬこと自立。(二) 自己の権力を本体とする事、とある。漢和大辞典には『独立して他の干渉を受けぬ事』とある。いずれにも出所が書いてないところを見ると、日本製の近代文字かも知れぬ。支那から来たものでなくてよかった。

東亜の盟首である大国の外交が今更に『独立して事を行い、他人の干渉を受けず、頼まぬ』ことを標語とし、国民もそれを一つ加えないと、何だか忘れ物をしたようで安心がならないということは、不思議な話である。だが枕詞はなくても間にあうが、あつても差支えないものだ。ただ云い放しにするよりも、『あしびきの山』とか『ちはやぶる神』とか、『あづさ弓』とかいった方が、有難味があつていゝ場合もある。

ただ一つ困ることは、こういう形容詞はその時の権力者の意志によつて、どうにでも解釈される一事である。当局者としても具体的に物をいうと、動きがとれなくなるのを懼れて、兎角にそういう文字を使いたがる。この際自主外交という文字も、その内容を今少し明瞭にさせて、内閣でそれを掲げれば大概の方向ぐらひは分るようになくしては困る。

三

筆者の考えでは、自主外交という文字に現れる国民的傾向の弱点は、それに積極性がないことだと思ふ。

自主外交というと直ちに強硬なる態度とか、断乎邁進とかいう文字を聯想する。これは一見非常に積極的であるように見える。しかし實際は、政策としてこれほど消極的であるものはない。それは衝突と摩擦に英雄的熱情を感じただけで、外交の目的たる事態の解決を目がけないからだ。幕末に例をとつてみると、嘉永六年六月にペリーが浦賀に入港した時、幕府は上下に対して開港の是非の意見を問うた。それに対し水戸斉昭の如き極端なる攘夷論者は別としても、いずれも原則的には攘夷焼払いを根底とし、ただ当方にはなお備えが出来ていないから、暫らく方便のためにかれと手を握り、数年の後、準備成るに及んで追払うという議論だった。井伊直弼、大槻盤

溪の如き開国論者も然りである。この意見に対し、当時進んで米国を利用して文明開化を持ち来たすべしというのではなかった。

しかも水戸斉昭の持つ歴史上の地位を見ても分るように、積極外交ということは対手を排撃すること、これを利用することは、その当時の言葉にはなかったが、追従外交だと思ったのだ。そして複雑怪奇なる外交記事と宮本武蔵とを併読愛好している現代社会にそういう考え方はないであろうか。

四

外交には二つの方法がある。一つは対手を排撃してしまうことである。今一つは対手と手を握って斯くして最大なる利益を自国のために収めることだ。前者が自主外交で、後者が追従外交だというものは、徳川斉昭一派が自主外交でその後の西郷、岩倉、伊藤などの開国論者が追従外交だということである。

英国とソヴェト聯邦が、今のところ日本が面する重要な外交対手国である。これ等の国に対しては二つの外交政策があり得る。第一には之と抗争をする方法である。今までの自主外交はこの方向をとって来たようだ。日英会談に現れた外交は確かにそうであった。ソ聯に対しても、ただ、

押しの一手であつた。

これに對して、今一つの外交の手はこれと組むことである。外交は對手のある事、如何なる内容によつて組むかの方法は、そう簡単ではないが、こちらの出方によつてそれは確かに可能だ。阿部内閣の新しい構想の自主外交というのは、その何れであらうか。

江戸城開け渡しの西郷と勝の肚芸ということが、しばしば国民から上々の政治であり、外交であることを認められながら、しかもこれが實際に適應されないのは何故であらうか。

米国は斯くして参戦した

第一次大戦に於ける径路

清沢冽

第一次大戦が始まった時には、米国の輿論は必ずしも聯合國（英仏側）に有利ではなく、寧ろその反対ですらもあつた。これは第二次大戦と異なるところだ。

米国は英国と言語を一にし、またその人種的構成においても、指導階級がアングロ・サクソン系によつて占められたことは事実だが——現在においては大分變つて来ている——同時にまた英国に対する反感も大であつた。元來が英国と戦つて独立し、その頃からの宣伝は小学校の教科書の中にも書かれて居るし、また移民として移入したアイルランド人の反英感情も手伝つていた。日本に來たタウセンド・ハリスが英国が嫌いであつて、一生英国製のものを用いなかつたことなどは、少し古いことであるにしても、一般の傾向を語るに足るであらう。

これに対して米国人はドイツとドイツ人に対しては、却つて懷しみと尊敬とを有していた。ドイツが急に国家的發展をなし、科学と哲学と文学の分野において素晴らしい進歩をなしたことは米

国人の讃嘆【贊嘆】するところであつた。またドイツ人は移民として優秀で、公人としても、私人としても、米人の最も望ましい隣人であつた。そういう点から戦争開始當時に於ては、米国側の同情がもしドイツ側であつたということが出来なければ、少なくとも五分五分だつた。

大統領ウイルソンは、その態度が極めて公平で、米国は絶対に中立を保たねばならぬことを強調した。元来、ウイルソンは内政問題に興味を有し、国際問題については不得手であつた。ハウス大佐の回想録を見ても、かれがウイルソンに対し、世界戦争の重大性を認識させるためには、余程の骨が折れたと云つて居る。かれは一九一四年八月十九日に宣言を發表し、「国民は行動においても、また思想においても中立でなくてはならぬ。合衆国は名実共に中立を厳守しなくてはならぬ。この事を一般国民に訴える」といつた。

この態度はウイルソンばかりではない。後には干涉論の急先峰であつたセオドア・ローズヴェルトも同じく中立の必要を主張した。更にウイルソン内閣の國務長官ブライアンは、世に知られた平和論者であつて、開戦の翌年（一九一五年）十月には、街の平和論者と共にカーネギー・ホールの演壇に立つたりした。このブライアンの態度は最後まで続き、一九一六年五月にルシタニア号が撃沈され、米国の対独第二抗議を發送するに当り、かれはウイルソンの準備したる通牒に署名する能わずとなして辞職した。

之を要するに第一次大戦の当初に於ては、米国の態度は、朝野共に中立であつた。ウィルソンの第二回目の当選は、この中立政策に対する国民的支援を示すものだ。

この米国の中立的態度が何故に変化したか。それには重に【主に】二つの原因を指摘することが出来よう。第一はドイツ人と米国人との心理的相違であり、第二はドイツの対米外交の謬りである。この外にも挙げねばならぬ理由は固より多い。例えば英国側の宣伝とか、ドイツの地理が米国の対英通商を遮断する必要に迫られていたという如きだ。しかしこれについては英国が宣伝をしたように、ドイツも宣伝をしたのであり、また海洋問題については英米の海洋自由に対する見解は、常に衝突して、しばしば危険域にまで行つたのである。

第一の心理的相違というのは、結局するところ両国民の有する哲学の相違だ。これは第二次世界大戦に於て明瞭な姿を以て現れて来たところの全体主義対民主主義のイデオロギー的衝突といつていいかも知れぬ。ドイツ人の心理からいえば、実力のあるもの即ち強者が、弱者に対してその意志を行うのは当然だ。ベルンハルズは「弱国は生存する価値はない、それ等は強国によつて併合さるべきものである」といつた。しかしこれは米国人の考え方からいえば、いかにも許し得ないところで反感のみが起るであらう。

ドイツの方は宣伝において種々不便があつたのは事実だ。英仏は海洋を支配し、また電線は聯

合国側の左右するところであるし、また言語の關係からも、確かに不利であつた。だがドイツ側が宣伝すればするほど、その効果は逆であつた。というのは、ドイツ人は極めて偉大な国民であるが、他国人の心理状態を解し得ない弱点を有する。その宣伝も自己の立場と主張を強調するに専らであつて、即ちそれは多分に主観的であつて、客観性を持たない傾向がある。後には駐米ドイツ大使フォン・ベルンストーフは首相ベツマン・ホルヴェヒに打電して、ドイツの対米宣伝は中止した方がよからうと進言したほどである。

これと共にドイツの白耳義^{ベルギー}進入が輿論に与えた影響も大であつた。ベルギーは米国人には平和なる小国と映じていた。その国に侵入し、且つルヴェーンの如き、リエジエの如き歴史的都市を砲撃したことが、反感を与えた。それよりも、もつと米国の民心を聯合國側に傾かしめたのは、この小国の白耳義の軍隊が、勇敢に相当長期に互つて抵抗したことであつた。どこの国でもそうであるが、米国人は特にアンダー・ドッグ（弱い犬）に同情する癖がある。ドイツは大敵を有していたのだから、正確に云えば弱犬をいちめていたのではないが、感情は常に理屈ではない。

今回の戦争においても、英国の抗戦力が続くに従つて、対英援助の感情が濃化したことは前回の大戦と同じだ。この事はまた日支事変についても同様なる傾向を示すのに氣付くであろう。

最初に中立的態度をとっていた米国が参戦した第二の理由は、カイゼルとその周囲が米国に対

する政策を謬ったことだ。こういつてもそれは絶対的な意味ではない。聯合國と經濟的關係から観て、米国はどうせ参戦したかも知れぬ。しかし外交的にこれを観れば、ドイツの対米政策が米国を戦争に追い込んだといえよう。

第一の事件はルシタニア号撃沈だった。手続きからいえばそれは間然するところではなかった。ドイツ大使館は一九一五年四月に米国の新聞に広告して英国及び連合国の商船で旅行する者の危険を警告した。この警告に面しながら英国汽船会社は大西洋横断の発着表を公表して顧みなかった。

ルシタニア号を撃沈したのはUボート二十号であつた。その艇長のシュヴィガー少佐は、後日発表された日記に「余は各自が自から救わんとするこの光景を見て、第二弾を発射することが出来なかつた」と書いて居る。乗員総数千九百廿四人の内、救われたのは七百廿六人で、米国人百八十八人、その内死者百十四人。このニュースは米西戦争のシグナルをなしたメイン号爆破以来の最大センセイションであつた。

米国参戦の機運はこの時（一九一五年五月）に始つたといつてもいいが、然し其時も大統領ウィルソンは中立的態度を保つていた。そして三日の後、彼はフィラデルフィアで演説をしたが、一言も直接的にはこれに触れず、かえつて「There is such a thing as a man being too proud to fight」

といつて参戦を否定した。ツ・プラウド・ツ・ファイトの文字はこの時に始まつた。ニューヨーク紐育ヘラルドトリブンの如きは大標題を以て「セオドア・ローズヴェルトが大統領ならざるを惜む」と書いたほどだ。駐米ドイツ大使ベルストフの自叙伝によれば、この時ウィルソンが眼で合図をすれば、それで米国を参戦せしむるに充分であつた。

ドイツは米国の抗議を受けて、その要求に従つた。一九一六年五月四日から一九一七年一月卅一日までの九ヶ月の間、ドイツの潜航艇の活動はウィルソンの主張する範圍に於て行われた。ドイツは米国の抗議には答へなかつたけれども、事実を以て要求を容れたことを示したのである。

この間にもドイツに対する問題はあつた。たとえば紐育ウオールド紙は、ドイツがアルベルトという五十歳ぐらいのドイツ人を頭目にする宣伝機関だけで二千七百八十五万弗の費用を費消したことを素破ぬいた。これは同人が秘密の鞆を遺失し、これが探偵局の手に入つて事件が明らかにされたものである。あるドイツ人の述懐によれば、この鞆を失くした事は、ドイツ軍がマルンにおいて戦争に躓いたと同じ大問題だといつてゐる。だが米国はなお参戦するには距離があつた。

ウィルソンは胸中に於ては聯合國に同情を有していた。併し公人として彼は絶対にこの事を表面に現さなかつた。この感情を知つてゐるのはハウス大佐と、秘書長タマルチーぐらいなものだつた。話は前後するが、ウィルソンが再選したのはこの頃のことである。

この事態を一転せしめたのは一九一七年一月卅一日に、ドイツが無制限潜航艇戦を米国に通告してからであった。即ちこの日、ドイツ大使は翌二月一日から、ドイツは敵に戦時禁制品を運ぶ如何なる船舶に対しても無制限に砲撃を加えることを通告して来たのである。そしてこの砲撃を避けるためには如何になすべきかも指示して来た。ハウス大佐の回顧録によると、この通牒を受けた時のウイルソンは氣の毒なほど沈み切ってしまった。かれはひどく煩悶したが、二月三日には国交を断絶した。

国交を断絶しても、まだウイルソンは戦争を回避しようとした。閣員の蔵相マカズー及び内相レーンの如きが強硬論を談話したのに対しては強く詰責した。彼は国防充実の権限を議会から得たけれども、尚参戦する意思はなかった。

そこへ一つの事件が現れた。ドイツの外務次官チンマーマンが駐メキシコ独公使に対して秘密訓令を發した。その要領はドイツはメキシコに同盟を提案する。もしドイツが米国と開戦する場合には、メキシコも米国と開戦する。そしてメキシコがドイツの援助を得て、テキサス、ニュー・メキシコ、アリゾナ州等を米国から取戻す諒解を与えるというのだ。

最初、米国朝野はこれを信じなかった。ドイツがメキシコを助け得る限界は限られているし、従つて米国の領土をメキシコに与えるということも変な話だ。聯合通信がこのニュースを發表し

た時に、上院は「それが事実であるかどうかを大統領に問う」との決議を通過したほどだ。ところが伯林からの電報は、却つてチンマーマン自身が、その訓令の事実であることを声明して来たのである。

これはドイツ人の考え方を現すものとして記憶すべきだ。ドイツ人は、ドイツが米国に対し決意を示し、その上にメキシコが米国を攻撃することあらば、米国は必らず屈するであろうと考えたのだ。即ち強硬なる戦争的決意を示せば戦争は回避しうべしと考えたのだ。ところが、こうした考え方が当を得ないのは、米国を知るものには直ちに分ることである。米国に対する外交は、外部からの弾圧でなくて内部的に抗争せしめることが必要だ。果然、政府の商船武装法案は下院を四〇三票対一三で通過した。但し上院はこの場合にも十一人の議員が飽くまで反対して仲々通過しなかった。続いてドイツの潜航艇は米国商船三隻を撃沈した。バランスの上に乗った事態は、些少の重量を一方に加えることによつて決定される。大統領ウィルソンは四月二日特別議會を召集してドイツに対し宣戦布告をなすべきことを要請した。

対濠外交の重要性

【無署名】

太平洋問題に於る濠洲の位地

最初の公使として、オーストラリアに赴任する河相達夫氏は、近く出発の筈であり、オーストラリアの駐日レーサム公使は、既に着任して居り、こゝに両国の関係は新たな段階に入ろうとしている。

併し乍ら、オーストラリアの太平洋上に於ける重要性については我国の認識は未だ充分だといふことは出来ない。尤も、今までと雖も日本とオーストラリアとの貿易関係に関する限りに於いては、その重要性が可なりな程度に認められていたことは事実だ。昭和十二年一月一日から施行された第一次日濠通商に関する措置、昭和十三年七月一日から実行された両国間の措置と、累次の交渉を経て、濠洲産の羊毛と日本製綿織物及び人絹、スフ織物との貿易は、両国必需品の有無相通の道を開いたものとして重要視さるべきであろう。昭和十三年の対濠輸出は六千九百万円、輸入は八千二百万円、昭和十四年は輸出七千二百万円、輸入七千百万円とその額は意外に多い。

だが日濠関係の重要性は、経済関係よりも寧ろ政治関係にある。この事は地図を見ると直ちに

明瞭になる。オーストラリアは南洋地域の外廓をなして居り、その方面と密接不離の關係にある。しかも同国は一方において、有力なる英帝国の構成分子をなして居ると同時に、他方においても米国と特殊な關係に入りつつある。米国と濠洲との間に、どれだけの話し合いがあるかは外部から窺知することを許さないが、その關係が日を迫うて密接になりつつあることを疑うことは出来ない。

カナダは従来も、現在も米国と英国とを結ぶ紐帶ちゆうたいの觀があつた。オーストラリアはその地位からいつて南洋につながる日本と米国と英国との間に介在する大きな存在だ。将来それが果して紐帶となるか、それとも離間する機關となるかは、今後の情勢と政治指導者の政策によつて決定されるであろうが、それが重要な役割を果たすことだけは否定するを得ない。

この点から觀てオーストラリアの政府当局者から、しばしば日本に対し、親善的ゼスチュアーをなしたつてゐるのは興味あり、かつ、注意すべき事実といわねばならぬ。即ち昨年十一月廿八日には、濠洲外相スチュアート氏は、その議會演説において特に極東情勢に言及し左の如く述べてゐる。

「政府は、日ソ兩國の關係が濠洲に対し重要影響を与えるものと考えるので、この兩國の外交政策に対し深甚の注目を払つてゐる。而して我濠洲の立場は東亞並びに太平洋の事態安定に

重大關係を持つものであるが、日本との国交關係はレーサム公使の派遣によつて充分調整の余地ありと確信するものだ」

越えて本年一月十二日には同国陸相スペンダー氏はラヂオで放送して、日本との友好關係を保持することを欲する旨を述べた。この演説は英國議會で問題を起し、議員が政府に質問したのに対して、自治領省次官は英帝國の日支事變を繞る対日政策について何等の變更がない旨を答えている。また他の議員は「濠洲政府は、英國が日独伊同盟に対し不満足である事實について、英國政府から知らされているか」との質問に対し、当局はこれに答えて「その問題に対し二国政府の間には意見の相違はないといつた。

これ等の事實は可なり重要かつデリケートだ。濠洲が英本國の意圖と政策を知らぬ訳はない。之を知つて、而もなお日濠親善を希望する旨を屢々放送するのである。そこにこの國が特殊の國際關係に立つてゐることを見るべきだ。

日本がこの際、明らかにして置くべきことが二つあろう。第一日本は白濠主義を、主義として承認し得ないことだ。濠洲の如き、肥沃にして巨大なる大陸が、人種が違ふと云う理由だけで、東洋民族の入國を遮断するとは天理に反する。これは詳しく説明することなくして、濠洲における識者が納得することだろうと信ずる。白人種なる故を以て何故に永遠に広大なる領域を私有す

る権利があるか。

第二に、併しながらこの事は、日本が遮二無二武力を以つてその主張を貫徹せんとすることを意味するものではない。日本の南洋前進の如きも、国内の極端論と、海外の恐怖論とが相呼応して無用な誤解を惹起している実状だ。この点は日本政府としても、少なくとも濠洲方面の如きに安心を与える措置を講ずる必要があろう。

何れにしても日本は、濠洲の呼びかけに対し今少し考慮を払うことを必要とする。オーストラリアが白濠主義によつて日本移民の流入に反対するのは、パリ平和會議の時に人種平等案が、同国全権の反対を主たる原因として流産した事実でも知れる。日本は現在、如何なる国に対しても移民を押し売りする意思はないが、主義として白濠主義を承服し得ないのは前述の通りである。たゞ当面實際政治の問題としては、移民問題は主義として以外には興味はない。現在のところでは、日本は他国からの移民を必要とする位に労働力の不足を感じている状態だ。

濠洲は他の問題については、その動機が恐怖であるにしても、乃至は好意であるにしても、日本と提携を欲しているのは事実だ。一九二二年のワシントン會議の前後を通じ、日英同盟の廃棄に最後まで反対したのは同国であつた。この点はカナダと好個の対蹠をなしている。現在、濠洲外相が日ソ関係を重視し、そこから日本との親善を希望するというのも、日本の南進に対する関

心を示すものだ。

以上のような国際事情にある濠洲自治国に対しては、日本は一層突込んだ話し合いをなすべきではないか。英、米に対する外交にしても、ある場合にはこの国を橋渡しにすることが効果的であろうことも考えねばならぬ。日濠両国の初代公使交換が行われる際、敢えて一般の注意を喚起する所以だ。

【東洋經濟新報 1941.8.2 p18】

開戦一ヶ月の経過から見た独ソ戦の今後 【清沢、丸山政男、竹尾、安藤、他】

清澤淵

独ソ戦の見透しに就ては二つの観点からなす必要がある。戦闘と戦争とだ。

戦闘については私は全くの門外漢であつて、これを批判する能力はない。柏林^{ベルリン}の発表と、モスクワの発表との間には相当の開きがあるようだが、その何れが真相を伝えて居るのかは、私の判断の及ばないところである。ドイツの軍事能力は欧州に冠たるものがあるから、その進行が多少鈍っているにしても、結局モスクワ陥落は時日の問題であらう。だがそのバトルと戦争の問題は、また別に考察されなくてはならぬ。戦闘の目的は对手を叩き伏せることであり、その時間においても限られている。しかし戦争はクラゼウィッチを待たずとも国策の延長であるから、国家の目的がそれによつて達成されるかどうかが判断の規範にならう。

この戦争の観点からいえばモスクワ、レニングラード、キエフの線が突破されたということだけでは不十分だ。またナポレオン時代に比して武器が発達しているからソ聯の武力的抵抗力は破壊されつくすだろうというだけでも充分ではない。ソ聯における国内事情がドイツに有利になつ

て、安んじて刃を返して英国を打つことが出来るようにならなくては駄目だ。即ちソ聯が債務ではなくて、資産になるに至らなくてはならぬ。

今のところ可能性は三つある。スターリンが頑張るか或はソ聯が没落して親独政権が出来るか、それとも無政府状態になるかだ。何れの場合にも急に片はつくまいと思う。今年は極めて好調にいつても、又来年明後年の問題がある。殊に英米は最早如何なる場合にも妥協しまい。とすれば独ソ戦争を、独ソ戦争としてののみ觀察するのは謬りで、世界戦争と不離な聯関において考えなくてはならぬ。善きにしろ悪きしろ性急なる判断だけは危険だ。

丸山政男

【要旨】 ロシア人の対独感情を考えれば、電撃作戦が奏功しないとすると、長期戦の様相を呈するであろう。五週間にしてその兆しは見える。たとえヴォルガの線を抜かれても、ウラルに立てこもり抵抗し得るであろう。

竹尾式

【要旨】 独ソ戦は長期戦の様相を呈してきた。ウラル以東に細々とした政権に成り果てるかも知れないが。

独ソ戦は長期化するであろう。

安藤英夫

【要旨】 一、二ヶ月でソ聯政権が崩壊するようなら戦争にならなかったであろう。

他省略。

注目すべき独ソ戦の帰趨

その結果と影響に善処せよ

独ソの戦争は両国の戦果に関する主張が相当に開いていて、第三者をしてその帰趨の公平なる判断をなさしむるのに困難を感じしめる。殊に独逸は沈黙を守っていた為、戦線の膠着が伝えられたが、此の程開戦六週間にして、やゝ詳細な戦果の発表を見た。之に依ると、ソ聯は大損害を蒙った事が知られ、ドイツ軍の無敵振りは驚嘆に値する。

しかし右の発表を觀ても、実は独ソ戦争が最後の段階に近づいたという感じを、一般としては受け得ないのである。ドイツ軍は益々大規模なる殲滅戦を遂行するであろうし、この次の目標はモスクワであろうから、こゝも何時かは陥落するであろうとの予感を持つ。だがそう考えても、それならその後は？この疑問が記者の頭に追いかけて来るのを掃いぬき得ない。モスクワが陥落すれば、戦略的には一段落つくが、世界戦争の一環としての独ソ戦争は、それが最後とは云い得ないからだ。

これについて参考になるのは、本誌前号に「開戦一ヶ月の経過から觀た独ソ戦の今後」の題

下に掲載した諸家の意見だ。こゝに集められた外交、軍事の研究者七名の内、六名までは独ソ戦争が長期化すると考えて居り、一名だけが赤軍の迅速な潰滅と、赤色政權の無力化による独軍の圧倒的勝利に結果すると観測している。素より国際關係に関する見透しなどというものは、當るも八卦、當らぬも八卦の域を出でぬものであるが、しかし独ソ戦争の如く既に一定の時期を経て、判断すべき論拠を或程度有する場合には六対一の結論は相當に尊重していゝであらう。

この短期戦か、長期戦かの問題に世界が関心を持つものには、主に二つの理由がある。第一はドイツの戦略は Blitzkrieg 【Blitzkrieg 電撃戦】によつて表象される通り、速戦速決と絶えざる行動力の特徴とする。このドイツ軍にとつては行動そのものが力である。戦争において停頓は不勢を意味する場合が少なくないが、ドイツ軍については、世界は特に左様に觀察するのだ。ドイツ自身としても、こうした内外の觀察に敏感であるのか、八月上旬の発表においては、何故に独ソ戦争が停頓したかの如く見えるかについて詳細に説明するところあり、西部戦線、バルカン戦線と比較して占領地域と戦果とにおいて決して劣つて居らないことを強調して居る。

第二の理由は更に根本的だ。ドイツが急速にソ聯を征服して、その返す刃で英本土敵前上陸を執行することに成功すれば、それは欧州戦争の一段落を意味する。こうなれば各国としても最早、逡巡も策動もする余地なく、挙つてドイツの勢力下に参加するのである。トルコ、スペイン、ヴ

イシー政府、^{スイス}瑞西等は何れもこの国家群の中にある。

仮に英本土敵前上陸は、暫らく後の問題とするも、独ソ戦争の勝利そのものがドイツに齎らす利益は自ずから明らかだ。ドイツは後方の脅威を完全に取除くことが出来るのだ。ドイツは更に、独特な科学的組織法によつて、その占拠地帯の経済開発、生産組織再編成を迅速に完遂するであろう。英本土に対し積極的に出づることが出来ると同時に、欧州大陸から英帝国の宝庫印度を脅かすことが出来よう。また欧州大陸諸国の動きと共に、日本の動向も独ソ戦争の結果によつて影響されないとはいえまい。斯くて独ソ戦争におけるドイツの完勝は、その影響に計り知るべからざるものがある。

これに反して独ソ戦争が膠着状態に堕せんか。その戦争の規模が大なるだけに、その結果も注目さるべきだ。第一には、一日でも長くなれば長くなるほど兵器、資材將兵の消耗増加を免れない。石油問題の如きが特に然りだ。第二にこの消耗は敵も味方も同様であつて、一方のみの損失にはならない訳であるが、この場合にはドイツ側には背後に英国及び米国という敵が控えている。英米はこの膠着状態を利用して、ドイツの攻勢に備えて居り、その防備は日を経るに従つて強化される。従つて英本土の敵前上陸は延期される可能性がある。第三に、ドイツの物資の取得は窮屈になる。元来、独ソ戦争そのものが物資獲得を一つの目標としたものである。しかも戦争が膠

着すれば従来ソ聯及びソ聯を通して流入したる物資も杜絶するのだ。第四に、ドイツ側の軍政領域が不安になる。この軍政区域は殆んど欧州全土に亙るものだが、秩序の維持は戦争の経過に密接に聯関せしめられる。

以上説いて尚詳かでないが、独ソ戦争の結果が、交戦国、特にドイツにとって極めて重大であることは明らかであろう。ドイツの戦闘に勝つことが、直ちに終局的勝利を意味するか否かには異論はあるが、急速なる完勝がドイツにとり極めて有利であり、また必須であることを否定するものはあるまい。

その独ソ戦争の結果は、他の場合に比し、比較的早く見透しがつくであろう。これが英独戦争の場合だと海を隔て、攻撃しあうのであるから、消耗も一時には来ないのであるが、独ソ戦争においては二千マイル近くの戦線に全力をあげて戦闘して居り、両国の人的、物的資源を急速に消耗せしめて居る。そしてこの大戦争は今や継続中であるから、今後一ヶ月、即ち九月半ばまでには大体見当がつくであろうと思う。

わが国の対外国策は確乎不動なるものがあり、今更動揺すべくもないが、しかしこれを具体化するためには国際情勢に適應する必要がある、その国際情勢の動きは、最も強力に独ソ戦争の結果が左右する。沈黙と静視そのものが一つの有力なる外交である一事に顧て記者は国民が注意深

く独ソ戦争の結果を見守ることを要望する。

『国際日報』第五号 1937.8.25

北支事変と支那側

1、支那外交部発表（内容）（七月十一日）

『今回の事件は全く日本側の計画的行動であつて、蘆溝橋に於ける日本軍の演習は非合法である。且両軍衝突後一旦成立した停戦協定を、日本側援兵の策で更に大規模の軍事行動に依つて目的の貫徹を図ろうとするものであつて、一切の責は日本軍が負うべきである。中国の国策は対外的には平和を擁護し対内的には生産建設に努力するものであり、日支間の諸懸案は平等互恵の精神の下に解決を図らんとするものである。幸に日本側が軍事行動を停止して前約に従つて戦闘行為を停止し、再衝突を避けて不法駐軍と演習を中止するならば、事態の好転を招来し得ると確信する。』

2、蒋介石の声明全文（七月十九日）

北支事変に関する七月十九日蒋介石の声明全文は左の通りである。

(二) 中国が対外平和と国内統一維持の根本政策を遂行して居たる矢先、突如として蘆溝橋事件發生して全国民を深刻なる憤激の状態に投込み、全世界に一大危惧の念を与えて居る。此の事件の齎すべき諸結果は、中国の存在自体と東亜平和とを脅威するに至つた。此の重大時期に際して種々なる質問、照会に答え予は次の如く述べ度^たいと思う。

中国民族は終始和平を愛好する。国民政府としては国内政策に關しては常に国内統一の維持を目標とし、且對外關係にては他の諸国との相互尊重と共存を目標として居る。

本年二月三中全会の宣言書が以上の諸点を明瞭に強調して居る。過去二箇年間の明白なる事實が証明する通りに、国民政府は日本に対する政策で一切の懸案を整調して一般に承認された、外交交渉の方法によつて公正であり解決の達成を常に期待して來た。我國民は中国の地位と立場を了解し、併せて我々は吾人の立場を認識しなければならぬ。弱体国家の人民として我々は自己の力量の程度で正当に評価せねばならぬ。過去數箇年間に於ける重大なる困難に當面して耐え難き苦痛を忍び乍らも、我々は隱忍自重面目を傾注して和平の確保に努力し以て民族復興の実現せられん事を希望した——故に一昨年の五全大会に於いて外交報告に當り予は『和平の維持が完全に絶望でない限り我々は決して和平を棄てず、我々は自制隱忍の極点に達しない限りに於て輕々しく犠牲を談じないであらう』と述べたが、其の後の中央執行委員會に於ける声明を見ても我々の

和平維持に対する熱意が明瞭である。仮令弱国たりとは言え、若し不幸にして最後の関頭に立ち到つたならば、我々の為すべきことは唯一、即ち我が全国民の精力の最後の一滴迄も傾倒して国家存立の爲抗争すべきのみである。而して一度右抗争が開始された時には時間上、情勢上からも中途にして止み以て和平を求めることは許されない。一旦紛争の始まつた後に和平を求めれば我国家の屈従、我民族の全滅を意味する条件を甘受せねばならぬ。願くは全国民は『隱忍の限度』と此の限度を越えた後に於いて惹起される犠牲の範圍を充分認識されんことを希望する。一度段階に到達すれば、我々は常に究極の勝利を期待しながら如何なる犠牲を払うとも、最後迄戦い抜かねばならぬ。若しも我々が躊躇し徒に一時の儉安^{とうあん}を貪るようなことがあらば、我々は永久に滅亡する外はない。

(二) 世上には蘆溝橋事件が何等予め計画されぬ突発的措施と想像する者があるかも知れないが、既に一箇月前から日本の新聞と幾多外交機関の言明に徴すも何等かの事件が起るだろうとの徴候が看取された。更に事件勃発の前後を通じて各方面から日本が塘沽協定の拡張を企図して居るとか冀東^{きとう}偽政府を拡大しようとか、第二十九軍又は宋哲元を迫出そうとか、其の他種々なる要求を押付けようとして居るとの報道を接受したことから見ても、蘆溝橋事件の勃発が偶然事件でないことが直に明瞭となること、思う。此の事件よりして日本が我々に対して極めて判然とした態度

を包蔵して居るので、和平は容易に維持し得ないことを悟らねばならぬ。我々の情報に依れば蘆溝橋事件を回避し得べき唯一の方途は、外国軍隊が我領土内に侵入して自由無制限に横行闊歩することを容認し、而も中国軍隊は其の移動に付いて幾多の制限を受けることを承認するの外なく、又或は相手方が我兵に発砲するを容認して、而も応射出来ぬと言うこと以外には其方法はなかつたであろう。苟も自尊心ある以上世界中如何なる国家と雖、かかる屈辱を甘受することを得ようか、東北四省を喪失して以来茲に六箇年次いで塘沽協定あり、次いで今や争点は蘆溝橋事件に於て、方に北平【北京の當時の呼び名】の城内に到達した。若し蘆溝橋が武力に依つて占拠されることを容認するならば、中国四百年の故都として全北支方面の政治的戰略的中心は敵によつて失われるのである。今日の北平は第二の奉天となり河北、察哈爾チヤハル兩省は東北四省と同一の運命に陥るであろう。万一北平が第二の奉天となつたならば、南京が第二の北平となることを如何にして阻止することが出来ようか。故に蘆溝橋を保全し得るか否かは中国存亡に懸る所である。今回の事件が果して平和解決が出来るかどうかは我等の所謂『隱忍自重の限界』に関する問題である。若し最悪の事態を避けることが出来ぬ段階に到達したならば、我々は断然抗争する外はなく、且最後の犠牲をも敢て辞せないものである。此の我々の抗争こそ外部より我々に強制されたものと言ふべきであり、我々は戦争を自ら求めるものではなく、唯我々の生存を脅威する攻撃に対して応

戦するものである。全国民は、中央政府が目下防衛手段準備の真最中であることを了解され度い。假令弱国であると雖、我等は民族の完整を維持して国家の存立自体を保障することを怠ることは出来ない。最善を尽して祖父伝来の此の遺産を保全することは、我等が全力を以て遂行せねばならぬ義務である。然し乍ら戦一度始まつたならば逡巡姑苒は許さない。最後迄戦い抜かねばならぬことを充分解せねばならない。若しも此の上更に一寸の領土が失わるに到つたならば、吾人は我民族に対して許し難い罪を犯すこととなる。斯の如き場合に於ける我々の義務は国民の全力を傾注して外敵に抗争し最後の勝利を期する一途あるのみ。

(三) 此の嚴肅な瞬間に於て、日本は蘆溝橋事件が日支両国の一大戦争を招来するか否かを決せねばならぬ。日支両国間に未だ和平の希望が少しも残つて居ないか如何かは、一に日本軍の行動如何に懸つて居る。和平に関する一切の希望を抛棄する最後の瞬間に至る迄、我等は依然として正常なる外交機關を以て事件の解決を求めるものである。今回の事件に付いて我等の態度は次の四件に要約出来る。

- (イ) 如何なる解決案も中国の領土完整と主權を侵害することを許さず。
- (ロ) 冀察政務委員会の地位は、中央政府の決定する所にして如何なる非合法的変更をも許さず。
- (ハ) 冀察政務委員会委員長の如き中央政府の任命した地方官庁が、外部の圧迫に依つて罷免さ

ることに同意することは出来ぬ。

(二) 第二十九軍の現在の駐屯区域に対して如何なる制限をも甘受し得ない。

如何に弱国たりと雖、国家たる以上右四箇条は交渉の基礎として承認し得る最小限度の条件である。若し相手方が地位を変えて我等の地位に立つて、東亞平和の維持を主眼となし、日支両国民を戦争の渦中に捲込みて相互に永遠の仇敵となることを希望せざれば、右四条件が考慮さるべき最少限度の条件であることを承認するであらうと思う。要するに今回の蘆溝橋事件の危機に當つて中央政府は中国の存立を確保すべく、明確にして断乎たる立場を堅持して居る。中国は独立国家である。我等は和平を欲求する。然し乍ら如何なる犠牲を払つても和平に執着するものではない。我等は戦争を欲せず、然し乍ら我々は我等自身を防衛するの己むなきに至るかも知れぬ。此の重大危機に當りて政府は冷静自重以て国民の指導に當るであらう。国民も亦真剣なる態度を以て一糸乱れざる統制を示さねばならぬ。民族に対する義務の遂行に関しては、南北老幼の別なく一致団結、鋼鉄の統制を示して政府の指導に従う様希望するものである。

『同盟旬報』

——『日本外交史』参照記事抜粋——

〔# 以下は、『日本外交史』に引証あるいは参照されている『同盟旬報』記事を抜粋したものである。直接本文又は脚注において引用又は関説された文を青字で示した。前後関連するとみられる記事も適宜収録した。〕

- 1 1940.7 中旬号 第4巻20号21頁 『日本外交史』第6篇第1章 註四
- 2 1940.8 上旬号 第4巻22号33頁 『日本外交史』第6篇第1章 註六、註一三
- 3 1941.2 上旬号 第5巻 4号112頁 『日本外交史』第6篇第1章 註二四
- 4 1941.7 上旬号 第5巻19号29頁 『日本外交史』第6篇第2章 註八
- 5 1941.7 中旬号 第5巻20号19頁 『日本外交史』第6篇第2章 註一四
- 6 1941.7 中旬号 第5巻20号20頁 『日本外交史』第6篇第2章 註一一
- 7 1941.8 上旬号 第5巻22号81頁 『日本外交史』第6篇第2章 註一六
- 8 1941.7 下旬号 第5巻21号86頁 『日本外交史』第6篇第2章 註一九

- 9 1941.8 上旬号 第5卷24号76-7頁『日本外交史』第6篇第2章 註二六
- 10 1940.7 上旬号 第4卷19号121頁『日本外交史』第6篇第2章 註三三
- 11 1941.9 上旬号 第5卷25号29-30頁『日本外交史』第6篇第3章 註五
- 12 1941.5 上旬号 第5卷13号89頁『日本外交史』第6篇第3章 註二八
- 13 1941.9 下旬号 第5卷27号86頁『日本外交史』第6篇第3章 註三〇
- 略 1941.12 上旬号 第5卷34号55頁『日本外交史』第6篇第3章 註三六【本文に引用通り】
- 略 1941.12 上旬号 第5卷34号17頁『日本外交史』第6篇第3章 註三九【注に引用通り】
- 14 1941.12 上旬号 第5卷34号9頁『日本外交史』第6篇第3章 註四一、四二
- 15 1941.11 下旬号 第5卷33号102頁『日本外交史』第6篇第3章 註五一

第一章「日独同盟の成立」 第一節「三国同盟の調印とその特徴」

阿部内閣は四ヶ月半にして為すなくして辞職し、海軍大將米内光政が組閣するや（昭和十五年一月十六日）、有田八郎は入って外相に就任したが、平沼内閣時代に対欧政策について一致の行動をとった米内、有田、石渡莊太郎が内閣の主勢力をなして居る以上、所謂外交転換は期し難く、それが原因をなして僅か六ヶ月の寿命で辞職した。（註四）

○ 1940.7 中旬号 第4巻20号 p20～21

米内内閣退陣まで

〔七・十六〕 畑陸相の单独辞表提出によって米内内閣は遂に桂冠のやむなき情勢に立ち至った。成立以来満六ヶ月の寿命であり事変発生以来四度目の政局転換である。新党運動の新展開——近衛公の枢府議長辞任に伴う新政治体制の確立宣言——有田外相声明放送問題等々この1ヶ月あまりの間に捲き起こった政治現象の波動は予想外に深刻な影響を政局に与えて混沌たる様相を呈したが、陸相の单独辞表提出によって複雑な微妙な政局は一先ず一新転機を劃するに至った。何が故に陸相の单独辞表提出を見るに至ったか、この質問に対する解答は当然米内内閣成立の経過にまでさか上って同内閣の政治性格に解剖のメスを振るわねばなるまい。

即ち阿部内閣の退陣によって強烈に戦時革新内閣の登場を要望した陸軍方面は、当時その人

的目標としては近衛公の蹶起を痛烈に希求し、米内内閣の出現などについては最後の瞬間まで夢想だにしていなかったのであつた。かくて既に米内内閣はその成立当初に於いて陸軍方面の政治意志と一致せざるものがあつたことは否定するわけにはゆかぬ。多分に現状維持的性格を持つ米内内閣の相貌ではあつたが、併し聖戦下の重大性に鑑みて、ともかく陸軍方面は一応これを支持することに決し畑陸相の留任によつて聖戦遂行の決意を固めたのであつた。併しながら成立した米内内閣は、先ずその試練の第一歩たる去る第七十五議会の業績に於いて、斎藤問題に遭遇したが、陸軍方面の強硬態度にも拘らずこれを頗る微温的な形で解決し、革新思想の点で陸軍との対蹠的な傾向を露に提示したのであつた。この政治意志の相違点は議會閉会後も、政策問題を中心に種々錯綜した形で露出し、米の問題、実行予算問題、就中外交政策に於いては陸軍側は頗る不満の意を表し、遂に之が去る六月二十九日の外相声明放送の問題となつて表面化した。この外相声明放送問題に対する陸軍側の真の見解は有田外相の声明を以て単なる看板の塗りかえに過ぎぬと断じ、かかる声明外交に墮することは、現下の変転極まりない国際情勢に対応する真の外交技術に非ざるのみか、却つて日本を究極的には外交的窮地に追い込むに過ぎざるものとしてこれに痛烈な修正の矢を放ち、まずかかる国際情勢に正しく即応して事変完遂、東亜新秩序の建設を成し遂げる為には（一）高度国防国

家の完成（一）外交の刷新（二）国内新政治体制の確立の実現を期すべきであり、とりわけ国内新政治体制の確立は凡ゆる政治問題の大前提をなすものであるとの結論を以て、遂に去る九日畑陸相は米内首相と会見して、目下政局の一大問題となっている新政治体制の確立に政府自らが協力姿勢を示すべきである旨を進言して首相にその勇断を希望したのであつた。これに対して首相は同感の旨を答えたが、具体的にはその方向を明示せず、そのまま荏苒日を経過するに至つたので、国際情勢——特にヨーロッパ情勢の急転によつて事変処理上重大な影響を蒙ることを慮つた陸軍側は、統帥戦略の立場よりしてかかる事態を一日も放置するを得ずとの態度を決し、去る十四日夜畑陸相はこの陸軍側の意向を明示したる文書を以て首相に意思表示を行なつたのであつた。この文書の内容として伝えられるところは、

大転換期に遭遇せる世界情勢に即応して日本もまた国家全力をあげて世界新秩序の建設に邁進せざるべからず、このため早急に国内体制の強化、外交の刷新を敢行し、客観情勢の急転に対応すべきであるにも拘らず、政府にその姿勢なく国民の信頼を失して徒らに日を経過することは事変処理上にも重大なる影響を及ぼすものと信ず、この際人心を一新して国内体制の強化敢行の為、政府は大乗的見地より善処すべきであることを陸軍の総意を以て進言す。

という意味のものであり、この文書による陸相の意思表示は首相秘書官を通じて米内首相に伝達された。

かくて陸軍側の最後意志の通達によつて既に政局の変転は必至となつたが、十六日午前九時五十分、畑陸相は定例閣議前に米内首相と会見、首相により

貴下のご意見は拝承したが自分は反対である。意見の相違を来たせる以上辞表提出を願うより他はない。従つてしかるべく後任陸相の御推薦を乞う。

旨の意思表示があり、陸相は直ちに辞表を提出し、一旦陸相官邸に歸つた上で、三長官会議軍事参議官会議に出席協議の結果、山田教育総監他数名に後任陸相受諾方を交渉したが、何れとも現下の情勢よりして受諾し得ずとの回答に接したので、同日午後三時半、陸相は再度米内首相と会見して、この旨を報告しここに米内内閣の瓦解を見るに至つたのである。

【記事は以下、「近衛公に大命降下」と続く】

2

第一章「日独同盟の成立」第一節「三国同盟の調印とその特徴」

大東亜とは如何なる区域を指すやについては、松岡は八月一日に外相談を發表して「皇道の大精神に則り、まず日滿支をその一環とする大東亜共榮圈の確立を図るにあらねばなりません」(註六)といつたが、新聞記者には蘭印も仏印もふくむ旨を附加えた。

第一章「日独同盟の成立」 第二節「日本の政策推移と鳥瞰図」

そこへ第二次近衛内閣の成立(七月廿二日)である。外相松岡は昭和十五年八月一日、「大東亜共榮圈の確立」を声明し「その中に「大東亜共榮圈に仏印や蘭印の含まれるのは勿論である」と明言した(註一三)。かくて「東亜の新秩序」は、三ヶ年近くの支那事変を経て、「大東亜の共榮圈」に躍進したのである。

○1940.8上旬号 第4卷22号33頁

松岡外相談發表

(八・一) 基本国策の中に包含せられたる外交方針につき、更にこれを敷衍する意味に於いて、外務省では一日午後零時半、左の如き松岡外相談を發表し、刻下の國際難局に対処すべき皇道外交の根幹を中外に闡明した。

△外務大臣談話

私は年来皇道を世界に宣布することが皇国の使命であると主張してきた者であります、國際關係より皇道を見ますれば、それは要するに各国民各民族をして各その処を得せしむることに帰着すると信ずるのであります。即ち我国現前の外交方針としては、この皇道の大精神

に則り、先ず日滿支をその一環とする大東亜共栄圏の確立を図るにあらねばなりません。これが雖て力強く皇道を宣布し公正なる世界平和の樹立に貢献する道程に上る所以であります。而して、我国民はこの道程に横たわるところの有形無形一切の障礙を排除するはもとより、更に進んで我に同調する友邦と提携、不退転の勇猛心を以て、天より課せられたる我民族の理想と使命の達成を期すべきものと堅く信じて疑わぬ者であります。

▲松岡外相談話「八・一」 松岡外相は一日外相談を發表した後、外務記者団との会見に於いて次の如き談話を行ない、松岡外交の根本方針につき更に説明するところがあつたが、右は所謂外交転換を闡明するものとして極めて注目される。

◇歴代内閣はその外交方針に關し、支那事變處理に關し帝國に好意を持つものは之と提携し、障礙を与える者は之を排除すると述べて居たようであるが、それは当時の國際情勢に於いてかかることのみが言い得たのであろう。現在に於いては既に之は自明の理であると思う。現内閣の外交方針としては、我對外方針を貫くために列強の間に積極的に日本が働きかけ、現在の環境にあつてもつくり得る友邦はつくるという方針である。仍てその友邦については自ずからできるものできないものがあるわけだが、従来の如くいくらやつても提携し得ない国とは、もはや手を握るべく努力しないつもりだ。即ちもはや八方美人的外交は全く拋棄する。

不介入方針については当然の間、依然として之を堅持するという以上現在に於いては何も云えない。大東亜共栄圏の確立は、先ず日滿支をその根幹とするものであり、支那事變処理を最も緊急要務とする事は變わりないが、南洋をも含めての大東亜であることは論を俟たないことであり、目標は日滿支のみならず仏印、蘭印その他を包含し、自給自足を完成せしむべき東亜安定圏の確立にある。要するに新内閣の外交方針に関しては以上に説明した以外は凡て云うことはできない。それは未だ云うべき時期に到達して居らぬだけのことであつて、時機到来した暁には凡て具体的に發表し得るのである。

外相談の海外反響

▲「東亜共栄圏」と新嘉波紙 シンガポール〔八・二〕大東亜共栄圏の確立を目的とする日本新外交方針を闡明した一日の松岡外相談に対し、排日紙シンガポール・フリープレス紙は二日の紙上にこれを論評した社説を掲載し大要左の如く論じている

◇日本が東亜の安定を希望することに対しては一応共感し得る所であるが、安定のために日本が採っている方法は諸国に恐怖を与えている。従つて結局のところ日本が現に行なっている方法は、安定的要素たるよりも寧ろ事態を悪化せしめる要素ではあるまいか。松岡外相は大東亜共栄圏に関する声明を行なうに当り、注意深く明確な言葉を避けているが、之は不幸にも

リップントロップ独外相が屢々大ドイツ建設に言及した事実を想起せしめ、新たな不安を起こさしめるものである。尚若し日本が右共栄圏より英米両国の貿易を駆逐するが如き場合には、日本はこれ等両国から猛烈な反対を受けることとは確かである。

3

第一章「日独同盟の成立」 第四節「大東亜共栄圏確立へ」

この日本進出が、利害の共通する国家群をして相互に結成せしむるに至るのは、勢いの自然であつた。しかも欧州においては英、独戦争は空と海からの襲撃により益々深刻になり、英国は極東において主動勢力となる余力なく、米国が対日包囲政策の主力をなした。外相松岡がオランダ領印度支那は、大東亜共栄圏の中にふくまれる意味の声明をなすや、蘭印政府はこれを正式に否定して、自国が東亜共栄圏外の国であることを発表した(註二四)。

○1941.2上旬号 第5巻 4号 112頁

在倫敦和蘭政府新秩序編入反対申入

ロンドン(一・一)【二・一】の誤植であろう】在ロンドン・オランダ政府は、一日ブタペスト駐日公使に対し、日本政府に蘭印の東亜新秩序編入に反対なる旨申入れを行なう様次の如く訓令

を發した。「蘭印を東亜新秩序に編入する案には、これが如何なる国の領導下に行われるものであろうとも、オランダ政府は之を拒否する。オランダ政府は自国の行動が新秩序というが如き考え方に指導されることに反対であり、将来それが適用されるのを黙認することもないのである。」

蘭印松岡声明を重視

バタヴィア〔二・二〕 東亜共榮圈に関する松岡外相の議會声明は各方面の反響を呼び、ロンドンに在るオランダ政府は昨日バプスト駐日公使に対し蘭印の東亜新秩序編入反対を日本政府へ申し入れる様訓令したと伝えられるが、蘭印各紙は連日の如くこの問題をトップ記事として大きく取扱い、多大の関心を示している。その論議も相当反撥的で日本の新しい理念の真意が何処に有るか諒解に苦しむとしている点が注目される。

4

第二章 「開戦前の外交交渉」 第一節 「松岡外相の退陣」

七月二日（昭和十六年）、政府、大本營、樞府首脳部を列ねる御前會議が開かれ、独ソ戦争に対する

態度が議されたが、その結果は松岡外相談として「広く眼を世界全般に互って注ぎ、諸列強一つ一つの動向と諸列強との間の関係等を絶えず注意しつつ極めて細心なる用意と、自ら恃むある準備と固き決心覚悟とを以て嚴重に事の推移を見守る考えであります」とだけ発表した（註八）。

○ 1941.7 上旬号 第5巻 16号 29頁

重要国策決定御前会議開かる

〔七・二〕【天皇の臨席下近衛首相、平沼内相、松岡外相、東条陸相、及川海相、河田蔵相、鈴木企画院総裁、山参謀総長、塚田同次長、永野軍令部総長、近藤同次長、原枢府議長が参集し、重要国策を決めたという記事で、その国策の中身はない。】

▲松岡外相談発表（七・二） 松岡外相は御前会議終了後、午後二時外務省において左の如き談話を発表した。

「松岡外務大臣談話」本日政府公表の通り、御前会議において重要国策の決定を見るに至りましたが、凡そ独ソ戦は、ただこれを独逸とソ聯との間に一つの戦争が勃発したのであるというような簡単な考え方で、これに処することの出来ないことは申すまでもないことであります。即ち直接これ繞る諸情勢はもとより、更に広く眼を世界全般に及ぼし、諸列強の一つ一つの動向と列強間の関係等を注視しつつ極めて細心なる用意と、自ら恃むある準備と固き

決心と覚悟とを以て、嚴重に事態の推移を見守る考えであります。私は愈々世界をあげて、就中直接我国の關係においては東亜において真に重大なる超非常時の時局が眼前に展開しつつあることを感じます。しかしかかる次第であればある程、我国民はますます冷静沈着にして上下一致、聖旨に応え来りわが進路を寸毫と雖も誤らないことを心掛けねばならぬと存じます。

5

第二章 「開戦前の外交交渉」 第二節 「第三次近衛内閣の対米交渉」

既に不動の国策あり、第三次近衛内閣の成功はこの国策の線の上を走って彼岸に突きぬけることによつてのみ可能である。近衛首相は「死力を尽して聖旨を奉公」(註一四)すると声明して決意のほどを示した。

○1941.7 中旬号 第5巻20号 19頁

近衛首相談話発表表

〔七・一八〕 政府は一八日午後十時二〇分初閣議後、左の如き「近衛内閣総理大臣談」を発表

△近衛内閣総理大臣談

私は図らずも三度拝命を拝し非才を顧みて寔に恐懼感激の至りに堪えません。変転窮まりなき現下の世局において皇国の使命は愈々重く真に挙国緊張の秋であります。微力果して克く負担の重きに堪え得るやを憚るものでありますが**死力を尽して聖旨を奉公し**以て、聖恩の万一に報い奉りたいと存じます。

固より現世局に処する皇国不動の国策は夙に確立せられている所であり、今日は忠ソの急速果断なる実行あるのみでありまして、之を遂げるの途派に国体の本分に則る国内諸体制の整備強化に在ります。私は一億国民の熱誠なる協力を得て此の時難を克服し一意肇国の大理想完遂に向つて邁進いたしたいと存ずる次第であります。

6

第二章 「開戦前の外交交渉」 第二節 「第三次近衛内閣の対米交渉」

外国においては第三次近衛内閣の成立について、種々なる観測をなした。ドイツ当局は米国大統領ローゼヴェルト三選以来の最大なる政治事件だとだけいつて口を噤み（註一）、また英米は同内閣の構成が文官七名、軍人七名だという事実を気にしながら「やゝ自主的な道をとるだろう」と要領不明の

」とをいつた。

同 1941.7 中旬号 第5卷20号 20 頁

海外反響

▲近衛内閣にソ聯次長言及 モスクワ〔七・一七〕……

▲英国結論を急がず ロンドン〔七・一八〕…略…

▲独、豊田外相注視 ベルリン〔七・一八〕 今回の近衛内閣の政変に対する独逸側及び中立国筋政界の注目は絶大なものがあり、**おそらくルーズベルト米大統領三選以来の最大の政治的事件として関心を払っている**。その理由は独ソ戦争の発生と米国の態度硬化により動乱はますます深刻を加えてきたので日本の態度如何が列国の利害に重大影響を及ぼすからである。この意味で豊田新外相の就任に重大関心が払われている。

▲新内閣に注視 ワシントン〔七・一八〕 米国各紙は新内閣が豊田大將を外相の椅子に据えたことに注目している。米国では新外相が海軍次官商工相を経てきた人物である以外余り知られておらず。記者は米国各紙特派員から豊田外相について質問を受けている。新内閣は刻々の情勢に即応して独自の立場から外交政策を採るものとみている…略…

▲新内閣は日本型 リオデジャネイロ〔七・一九〕…略…

▲伊紙豊田外相任命を重視　ローマ〔七・二〇〕…略…

7

第二章 「開戦前の外交交渉」 第二節 「第三次近衛内閣の対米交渉」

日本陸海軍の行動は常に疾風の如く早い、右の取極めに準拠して、我が陸軍部隊の一部は既に七月廿八日南部仏印に上陸し、八月四日には完全に配置を終った（註一六）。

○ 1941.8 上旬号 第5巻22号 81 頁

皇軍の南部仏印配置完了

サイゴン〔八・四〕 共同防衛の重大使命を負う皇軍南部仏印増派部隊は四日を以て予定通り配置を完了したので派遣軍は四日左の如く発表した。

△仏印派遣軍四日午後六時発表　日仏印共同防衛協定に基づき派遣せられたる仏印派遣軍は、七月二十八日南部仏印に上陸を開始以来サイゴンおよびナトラン附近各地区に進駐の所、各地とも仏印側の友交精神により極めて平和裡に進捗し八月四日その配置を完了せり。

第二章 「開戦前の外交交渉」 第二節 「第三次近衛内閣の対米交渉」

その要旨は「米国が日本に石油を送ることを許容して来たのは南太平洋において戦争勃発を阻止するためであつた。これは我々自らの幸福と、英国の国防上の利益と海洋自由とのために有望な手段で、それはまた実際過去二年間は確かに有望だつたと考えて差支えなかつた。もし米国石油の対日供給が遮断されていたならば、既に吾々は戦争の渦中に飛込んでいたかも知れなかつた」というにあつた（註一九）。

○1941.7下旬号 第5巻21号 86-7頁

対日関係

邦船足止めに米の態度曖昧 ワシントン〔七・二一〕…略…

日本の対パナマ貿易一時中止 ワシントン〔七・二一〕…略…

邦人の沿岸漁業を禁止 ニューヨーク〔七・二二〕…略…

日本人の航空旅行禁止 ニューヨーク〔七・二三〕…略…

対日政策に硬軟両派 ワシントン〔七・二三〕…略…

独立した極東政策をもて（外交委員長談） ニューヨーク〔七・二二〕…略…

対日通信検閲また考慮せず ワシントン〔七・二三〕…略…

ウイルキー対日石油禁止論 サンフランシスコ〔七・二四〕…略…

対日石油供給は戦争防止策 （ル大統領）ワシントン〔七・二四〕ルーズベルト大統領は二十三日市民防衛局市民義勇委員会の講演で非公式米国の対太平洋外交政策に就いて長広告を揮つたが講演中の言辞が総て「過去形」を取っていたのは意味深長であつた。講演要旨は左の通り

「米国は日本が蘭印の石油に手を出さぬようにと思つて、アメリカ石油入手を許容して来た。

当時はこの対日石油供給は、我々自らの幸福と英国の国防上の利益と海洋自由とのために南太平洋から戦火を遠ざける為の有望な——二年間かは確かに有望だつた——手段だつたと考へて差支えなかつた。アメリカ人は東部諸州に対してガソリン消費節約が要求されているのに、西部太平洋岸から何千噸としてガソリンが日本へ送られているので不思議に思ふかも知れぬが、その解答は頗る簡単である。目下世界中に戦争が起り、而も二年近くも続いているのだ。米国が始めから努力したのは戦争を勃発地以外の或特定地域へ拡大させまいということであり、この特定地域の一つは太平洋だつた。我々が錫やゴムやその他のものを入手し得る場所は、今までは南太平洋の蘭印、海峡植民地、印度支那であつた。又我々は英国援助のため濠州の余剰肉類、穀物玉葱麦等の食料を得なくてはならなかつた。我々

自身の国防的観点から見ても、南太平洋に於ける戦争勃発を阻止することは重要であつた。故に我々の外交政策は、南太平洋に戦火の波及するのを停止せんと試みたのである。若し米国石油の対日供給が遮断されていたならば、既に一年前に我々は戦争の渦中に飛び込んでいたかも知れないのだ」

國務次官対日強硬声明 ワシントン〔七・二四〕…略…

対日石油輸出国防に支障なし ロサンゼルス〔七・二四〕…略…

英米両市場で本邦債暴落 ニューヨーク〔七・二四〕…略…

米対日武力発動不可能 ワシントン〔七・二六〕…略…

日支資産凍結

日本資産凍結発令 ハイドパーク〔七・二五〕…略…

支那資産も同時に凍結 ハイドパーク〔七・二五〕…略…

日大統領凍結令全文 ハイドパーク〔七・二五〕 日支資産凍結に関する大統領令全文は左の如し

「大統領は、大統領が先に発布した無制限国家非常時宣言に基づき、今日米国に於ける日本資産を凍結せしめる大統領令を布告した。而してその様式は一九四一年六月十四日欧州諸国資産を凍結せしめたのと同じのものである。この方策は、結果として日本の利益が包含さるる

凡ゆる金融及び輸出取引が政府統制下におかれ、本令の違反には刑事上の処罰を科せられる。この大統領令は、一九四一年六月十四日の大統領令と同じく、何よりも先ず米国の財政的便宜及び日米間の通商が国防及び米国の利益を毀損するが如き方策に使用さるる事を防止するものである。その目的は、征服による不法圧迫によって獲た資産を米国内において処分する事を防止し、又米国内に於ける破壊的策動を防止するにある。蔣介石氏の特別要請に基づき、且つ支那政府を援助する目的を以て、大統領は同時に在米支那資金に対し凍結統制を適用することとした。支那資金に関する許可制の運用は、支那政府の外国貿易及び為替取引上の立場を強化する見地に基づいて行われることになっている。支那をこの大統領令に包含せしめたのは、支那政府の希望に基づくもので、米国の支那援助政策の継続と一致するものである」

凍結令適用細目 ワシントン〔七・二五〕二十五日発令をみた日支在米資産凍結令につき財務省は同右適用範圍を左の如く規定した

現金、小切手、手形、地金銀、銀行預金、貯蓄預金、一般負債、金融諸証券、紙幣、社債、公債、諸債券、利札、銀行引受手形、担保抵当、質権、倉荷証券、船荷証券、受託領收証、取引証券、貨物、装品、商品、家財、船舶、積載貨物、動産、担保物件、土地売買契約、借地権、地代、選択売買権、無記名証券、支払証券、帳簿勘定、取引引受契約、土地使用料、特許権、商標権、

著作権、保護預かり函、年金、収益分配契約
尚財務省は在留邦人に対し生計費その他同種の目的により引出しを許可すべき金額を決定する法令を近く発表する予定なる旨を言明した。

9

第二章「開戦前の外交交渉」第三節「ABCD包囲陣」

「合法的権益に対する最大の保障」をいつたチャーチルは、その末文において、日本に対する英米の提携を明かにし、恫喝的文字を使用していることを見るであろう（註二六）。かれは日本の如き尚武的強国に恫喝の無用なることを知らなかった。

○1941.8上旬号 第5巻24号 76-7頁

英首相放送演説 ロンドン（八・二四）

チャーチル首相は、二十四日夕全英帝国に向け放送を以て、英米洋上会談以後の英政府の対外方針に関する第一声を発した。右演説に於いてチャーチル首相は、特に英米の日本に対する態度を闡明し、過去五ヶ年の日支事変の経過をドイツの軍事行動と比較叙述した後、日本

の仏印進駐を以て英領に對する脅威と誣い、相当痛烈な警告的言辞を弄して居るが、他面和平解決の希望をも示唆している。右放送演説内容次の如し、

「侵略によつて苦難をなめ、荒廢に沈淪すべき事情にある大陸は、独り欧州だけではない。日本軍部は過去五ヶ年間の長期に亙り、ヒットラー及びムツソリーニの手法を以て新欧州の啓示であるかの如く受け容れ、すべてヒットラー、ムツソリーニの遣り口に從つてその態度行動を定め、支那五億の民衆を侵略蹂躪している。日本軍は支那の広大な地域を無益に彷徨馳驅し、到るところ殺戮潰滅崩壊をほしいままにし、これと呼んで『支那事變』と称している。今や、日本軍は制覇の手を南支那海にまで延ばし、哀れむべきヴィシー・フランスから印度支那を奪い、軍事行動によつてタイ國を脅威せんとしている。今や日本軍はシンガポールを威嚇し、英國と濠州の連携を脅かして居ると共に、米國の保護下にある比島を脅迫している。日本軍のこの動きは阻止しなければならぬことは明らかであり、平和的解決を齎さんとして凡ゆる努力がなされるであらう。米國は、日本の合法的權益に對し、最大限の保障を与えんとする正しい友好的解決に到達せんとして、無限の忍耐を以て努力している。我々はこれ等の交渉が成功することを熱心に希望する。然し、余は、若しこれらの希望が実現しなかつた場合には、勿論我々は躊躇なく米國の側に立つであらう事を言明しなければならぬ。

次に余とルーズベルト大統領との洋上会談だが、我々が会見した時の考えは、世界全国民就中庄迫され征服された諸国民に対し、端的に大胆率直な戦時声明を発し、これにより英帝国及び米国が進むべき目標を示すことであつた。然しこれを前世界大戦の後半同盟国が取つた態度に比べれば、二つの判然たる相違点があることは何人も看過すべきではない。

相違点の第一は、英米何れも最早再び戦争はないだろう等とは確言しないことこれである。従つて我々は罪惡国に対し効果的に軍備を撤廃せしめる一方、我々は適当な国防を維持し、かくして我々が予見し得る如何なる時期にも戦争の再発を防止する充分の予防的方法を講じようと思う。

第二の相違点は、一九一七年に於けるが如く、あらゆる種類の海上封鎖乃至は通商妨害を行なつてドイツの通商を壊滅せしめようとするようなことなく、反対に一大国を衰退せしむるが如き方策或はその国相應の生活を営む手段をその産業企業より奪うが如き方策は、全世界就中英米の利益に反するという建前を採つたことである。これはその影響甚大な主義政策の変更であり、各国何れも深く思いをここに致す必要がある。被征服諸国は苦難の試練を受けるであろうが、我々はそれら諸国に希望を与えてやらなければならない。隧道は暗くても行く手の果てには光明がある。これこそ大西洋会談の象徴でありそのメッセージである。

諸君はおそらく『大西洋大憲章』と呼ばれる英米共同宣言に於いて、米国大統領と英国代表とがドイツの暴虐を永久に殲滅せしむべきことを共同誓約したことを注意したろうが、これは正に嚴肅にして重大な約束であつた。この企図は有終の美をなさねばならぬが必ず成功するだろう。勿論右目的を実行するために計画中であつた實際的工作は既に緒についた。

ヒットラーが、未だ米国に対する宣戦を布告しないとすればその理由は明瞭である。即ちドイツの常套手段である個々撃破作戦であると余は信ずる。実にこれこそドイツが世界の大部分を奴隸化した唯一の方法である。ヒットラー總統はその宣言せる目的により、さきに英本土に向けようとした全独軍を、今や東へ引返してソ聯と戦つてゐる。若しヒットラーが多額の困難を冒して、万一我々の生活を破壊し得るならば、その時こそヒットラーが米国および広く西半球諸国と闘う秋である。ヒットラーが逐次有効に用ゐ來つたところの單純にして陰險な計画は、これを終局まで適用すればヒットラーが世界の支配者となると云うことに他ならない。一部の具眼者が、夙にこのことを指摘注目し來つたことに對し、余は感謝の情禁じ能わざるものである。余はルーズベルト大統領が、米国及び英国民が現在直面してゐる緊迫せる危険を、真に認識してゐることを知つて喜びを禁じ得なかつた。ルーズベルト大統領が八年前に米海軍の再建を開始したことは神の恵みに依るものであつた。若し米海軍を強化し

ていなければ新世界は今日欧州の独裁者の命令に服さねばならぬ羽目に陥っていたであろうが、ルーズベルト大統領の先見の明により米国は今日以前その巨大なる国力を動かす力を有し、自ら救うと同時に人類に対し比類なき奉仕をなし得るのである」

第二章 「開戦前の外交交渉」 第四節 「日米交渉と米国立場」

一時、ドイツが仏国を叩き伏せた直後の昭和十五年七月六日、大統領ローゼンヴェルトは秘書アーリーの口を通じて、アジア・モンロー主義に関する声明を行い、蘭印以外の領土変更について干渉の意図なきことを仄めかして、その九国条約的立場に変更を加えたかに見えたが（註三三）、しかしその後再び大にしては世界、小にしては東洋の番犬的立場に復帰した。かかる立場を大東亜建設に邁進しつつある日本が許しうるものではない。

○1940.7 上旬号 第4巻16号 121頁

モンロー主義説明は日本を対象 ニューヨーク（七・六）五日発表されたモンロー主義の解釈に関するハル長官の声明は、特に日本の名を挙げていないが【各紙は日本を対象と報じ、…中略…】又消息筋では、同声明の最後に於いて、米国は平和的秩序再建の為各国との協力を継続する

と述べているのは、英仏が援蔣ルートの遮断を強要されとも、米国は依然援蔣を続けることを示唆したものであると見ている。

米州外領土問題に干渉せず——ル大統領意見発表——

ハイドパーク（七・六） 目下当地の別荘に滞在中のルーズベルト大統領は、昨五日、ハル国务長官がその対独声明中に明らかにした西半球モンロー主義の解明を敷衍して、六日アーリー秘書を通じ、米国は欧州およびアジアに於ける如何なる領土的問題にも干渉する意志はないと、大要次の如くその意見を發表した

「米国は、欧州並びにアジアに於ける領土上の調整等、西半球外の領土的問題に対しては毛頭干渉の意図を有していない。かかる問題に対しては米政府は傍觀の態度を持するものであり、欧州及びアジアに対しても、西半球への我がモンロー主義の適用解釈と類似のモンロー主義の適用が有るべきであると考えている。米国のモンロー主義の解釈は次の通りである。

一、米国は従来戦敗諸国が領有していた如何なる島嶼も、亦その他の領土も接収するものではない。

一、しかし米国はこの種の領土の管理乃至、その最後的処理は元々米国のみではなく、全西半球諸国の協議によつて決定さるべきものであると確信し、飽くまでもかかる態度を堅持

するものである。」

なおアーリー秘書は、西半球外諸大陸に於けるモンロー主義の適用に關してはその例を仏領印度支那にとり

「米國は、例えば仏領印度支那の如きも、全アジア諸國が之につき協議の上問題を決着せしめるべきであり、歐洲その他に於ける場合も同様の手續が執らるべきであると信じている」と語つた。

ル大統領談話東亞への發言權拋棄せず　ワシントン（七七）　ルーズベルト大統領は六日アーリー秘書を通じ世界各方面に於ける地域的モンロー主義の適用を示唆する談話を發表して注目を惹いたが、ワシントン政界ではルーズベルト大統領の談話を、一見、所謂「東亞モンロー主義」を承認し、日本の東亞新秩序建設の希望と合致するようにみえるが、仔細に検討すれば右は決して極東問題に対する米國の發言權を拋棄を意味するものではないと觀測している。

…略…

蘭印問題には言及せず　ニューヨーク（七七）　六日ルーズベルト大統領がアーリー秘書を通じて行なつた談話中に「米國政府は蘭領東印度は米國の國防と權益に關係あるが故に、その処分に就いては發言權を要求する」旨明らかにしたとの報道が伝えられているが、右は事実と

相違し、アーリー秘書官は記者側から「東亜モンロー主義が確立された場合蘭印はどういうことになるか」との質問があつたのに対し、ただ難しい顔をしただけで蘭印に関しては何事も語らなかつた。…略…

1

第三章「大東亜戦争の勃発」第一節「東条内閣の出現」

所謂ABCDの対日包囲陣が益々強化されるのを見るや、これを黙視し得ずとなして、大本営陸軍報道部長陸軍大佐馬淵逸雄は、九月一日東京に催された震災記念国民防空大講演会において、英米が経済宣戦を布告した不法を述べ、「帝国が対日包囲陣を克服することは、一日を空しくすればそれだけ識らず知らずの間に帝国の危険を招く次第である、仮令ここに新たな戦争が起らない場合においても、重要資源の消耗はその割合たとえ少なりとするも、結局或る期間内に消尽するのは必至であつて、いわゆるジリ貧の陥ることは当然といわねばならぬ」といい、「我聖戦目的達成のため、第三国に対する外交交渉も以て遂に平和解決の途なきにおいては、帝国は実力に訴えて対日包囲陣を突破し、これによつて事態の解決を計らねばならぬ」(註五)と警告した。それは近衛メッセージが米国大統領に手交された三日後のことである。

○1941.9 上旬号 第5巻25号 29-30 頁。

馬淵陸軍報道部長講演【抜粹】

〔六・一〕大本営陸軍報道部長馬淵逸雄大佐は一日午後七時半から神田区共立講堂に於いて震災記念国民防空大講演会に於いて「戦時下の国民の心構え」と題して講演を行ない、BKより中継放送をした。その要旨は左の如くである。

「戦時下国民の心構えは自分一個の利害を超絶し、戦争目的に徹し国家民族のために一身一家を捧げて立つの気構えがなくてはならぬ。【…中略…】職域奉公という事は自己の職責に邁進するという意味に於いては結構であるが、今や実業家は金を儲け、学者は研究するだけが唯一の奉公ではなく国家の必要となれば大学教授も金持ちも身を卒伍に置き剣を執つて祖国を守るほどの気持ちが必要となれば成らぬ秋になつてゐるのである。【…中略…】長期戦化した支那事変も解決漸く遠からずと思わしめるに到つた時、突如勃発した独ソ開戦は世界状戦を急転せしめた。その東亜への影響は帝国を対象として、英米を主体とするABCD聯合の結成を促進せしめた。ただしこの場合による政治的軍事的経済的対日包圍陣は、その従来とり来つた援蒋行動と共に只に支那事変完遂途上に於ける一大妨害たるに止まらず、今や帝国自衛上直ちに死活的の脅威を加え来つた。ここにおいて帝国は帝国は抗日支那の背後的勢力たるABCD聯合の抗日包圍陣を粉碎しなければならない立場の立つてゐるのである。この対日包

困陣突破はA B C D聯合就中その主体たる英米との一大長期戦に突入するものであつて、これは寔に文字通り帝国の興亡を賭する一大危局なりと言ふべきである。【…中略…】殊に戦争遂行に必要な我が戦争資源の貯蓄量が大東亜共栄圏によりあらたに生産される分量により接合せられるのでなければ帝国の前途は甚だ危険と言わなければならぬ。これがために大東亜共栄圏の確立は實に帝国死活のよつて分れる所である。然るに我が南方をめぐる英米の施策は帝国を逐次包囲し、本国に於いては資産凍結通商条約の廃棄をなし、事實に於いて經濟宣戦を布告したるに等しい状態となつた。資産凍結とこれに伴う南方包囲陣態勢のため、我が生産と消耗にバランスを失う虞れのある日本としてはこの対日包囲の突破といふことを真剣に考えなければならぬ。換言すれば、帝国が対日包囲陣を克服することは一日を空しくすればそれだけ識らず知らずに間に帝国の危険を招く、仮令ここに新たな戦争が起らない場合においても、重要資源の消耗はその割合たとえ小であるとしても、結局或る期間内に消尽するのは必至であつて、いわゆるジリ貧に陥ることは当然といわねばならぬ。【…中略…】かくて彼等は巧みに威嚇と媚態とを※「#1字不明」用してこれにより戦争への移行を極力控制しつつ經濟圧迫によつて逐次ザリ貧に陥らしむるが如く精密なる計算のもとに刻々圧迫の手をしめ來つたのである。その最後の手は資金凍結による実質的經濟封鎖であつて、日本の南部仏印

兵力増派は直ちに比島やシンガポールを脅威するものであり、少なくとも彼等の資源獲得を妨害する恐れありとの理由を以て最後の経済圧迫の挙に出たものと言わざるを得ない。英国は自己防衛のためには次から次へと小国を犠牲に供して顧みず、最近においてはあの無※※「#2字不明」なるイラン進駐をほしきままにしたのであつて、米国も亦さきに北洋の平和境たるアイスランドをその兵力下に収め、特に東亜においては英国との共同のもとに自国及び英領の資源のみならず蘭印、泰国等の第三国を※「#1字不明」要して帝国の自存上欠くべからざる必需品の供給を遮断せしむるという人道上許すべからざる挑戦を敢てして帝国最後の息の根を止めんとする挙に出で来たと見られるのである。※「#1字不明」うに以上の如き英米の非友誼的※※「#2字不明」行為は帝国をして否応なく攻防死活の岐路に立たしめつつある。今や現状勢に処する決意と之に伴う打開の対策如何とは、実に帝国の浮沈を決する鍵と言わねばならぬ。然らば帝国は現下千載の一大危局を超克せんがためには如何なる方向に歩むべきか。そもそも兵は兇器である。これが使用は最も慎重を要す。真にこれによるほか打開の道なきに非ざれば固より紊りにこれを使用すべきでない。故に我が当局は今日まであらゆる隠忍と努力とをもつて飽くまで外交上の折衝により、ひたすら危局の回避に努力、今後においてもなお絶大の努力をもつてその破局を防止する如く平和的努力が続けられるであらう。

こうした外交的平和的手段によつて打開の道が開かれるならば、帝国は勿論世界人類はまた文明のためにも真に慶賀すべきである。然しながら大東亜共栄圏の確立は帝国死活の絶対的要求に基づくものであるから如何なる平和的手段と言えども或期間以上に遷延を許さないのは戦略的要求の絶対性より見て之亦問わずして明らかな所である。去る八月二十四日英国首相チャーチルは我が聖戦目的を冒瀆し【…中略…】。如何なる状態に逢着しても日本は国民政府を育成強化し国民政府は日本を戦力増加に絶大なる努力を払い、共に目的に向つて進むより外にないことは一点の疑いも挟む余地がない。次に我が聖戦目的達成のため第三国に対する外交交渉を以て遂に平和的解決の途なきに於いては帝国は実力に訴えて対日包圍陣を突破し之により事態の解決を図らねばならぬ。この場合戦争が如何に長期化し如何に惨烈激化するとも此の戦争が帝国の自存自営上死活を決する絶対絶命のものである以上敵火の下、仮令国土を焦土とかし国民が最後の一人となる迄も戦い抜き以て我が万邦無比の国体と光輝ある歴史【ママ】とを死守しなければならぬ。…略…

第三章 「大東亜戦争の勃発」 第三節 「米国は何故過誤を犯したか」

第四に、それ等よりも更に強い原因は、米国上下を通じての著しい日本軽視、及び日本に対する不信の風潮である。彼等は日本経済の英米依存性の弱点と支那事変による消費を過大視して、経済圧迫によって日本が疲弊困憊すると考えた。そればかりではなく、彼等は日本の軍力をも蔑視して、上院においてすらも簡単に東京を飛行機で爆撃し得べしと論ずるものあり（註二八）、或はまた日米開戦は経済断交の継続に過ぎぬといって戦争論を主張したものがあつた。

○ 1941.5 上旬号 第5巻 13号 89 頁

エリス議員暴言 ワシントン〔五・五〕【…中略…】エリス議員（民主党）は「日本に期限付きの最後通牒を送り米国と戦争するか枢軸国を脱退するか二つに一つの返答を求めよ」と大真面目に主張、満場の失笑を買った…略…

ペッパー上院議員対日挑戦演説 ワシントン〔五・六〕…略…「今や日本に対し齒に衣を着せずしてものを言うべき秋が来た。必要とあれば日本に対し率直な行動に出てもよいであろう。我々は米国が外の敵と係りあっている時に日本が米国をやっつけようと短刀を擬しているのを知っている。米国は須く先手を打たねばならぬ。自分は最新式の爆撃機を操縦して行けば僅かな操縦士でも東京を爆撃し得ると信ずる。」…略…

▲ペッパ―議員に非難轟々 ワシントン〔五・六〕…略…

△クラーク議員（民主党） ペッパ―議員はヒットラー主義の世界最大の弁護者である。同氏の演説を聞いていると何かルーズベルト大統領が一年前に米国を戦争に卷込まなかったことが悪かったかのように聞える。…略…

△ボーン議員（民主党） ペッパ―議員は船舶護送をやれとか米国の爆撃機が東京を壊滅出来るとか云っているが、同君の意見だとこれにはネーザン・ヘール（独立戦争当時ワシントンの命令で単身敵線を突破せんとして捕縛銃殺さる）の様な愛国者を少しばかり犠牲にすれば、多数の米国人が助かると考えているようだが、世はこれに賛同出来ない。数人の犠牲者を出したおかげで米国は全体戦に卷込まれ全軍が戦死せねばならぬような羽目に陥るであらう。

13

第三章 「大東亜戦争の勃発」 第三節 「米国は何故過誤を犯したか」

或はまた日米開戦は経済断交の継続に過ぎぬといつて戦争論を主張したものがあつた。中には日米関係を再検討して、新しい立場から国交調整を企図する者もあつたが（註三〇）、全体的にこれをい

ば彼等は大国に対する認識を欠き、彼等のなして居ることが日本を駆って戦争に赴くのやむを得ざらしめることを知らなかった。

○ 1941.9 下旬号 第5巻、第27号 86頁

太平洋問題委員会結成 ニューヨーク〔九・二五〕

元東京YMCA主事マーク・R・ショウ氏は民間側の努力により日米関係好転空気を醸成する趣意により二十五日太平洋問題委員会の結成を発表した。同委員会は日米関係の前途を憂慮する極東関係米国人同志を糾合、日米戦争防止及び支那事変の調停の可能性を究明することを当面の目的とするもので、委員会は結成第一日別項の声明書を発表すると同時に、委員会結成趣意書を新聞通信社その他各方面に送付して、大衆への呼びかけ工作を開始したが、更に日米支関係諸問題討議のため、十月下旬ワシントンに米国内極東関係者を招致して太平洋問題会議を開催することとなっている。同委員会はショウ元東京YMCA主事を委員長代理、著術家O・K・アームストロング氏を書記長、極東経済専門家J・A・シュンペーター夫人を幹事とするほか主なる顔ぶれは左の通り

△戦争防止委員長フレデリック・J・イービー、バクスター国際経済研究所長ウィリアム・J・バクスター、評論家ウィリアム・H・チェンバレン、ジョン・コール・マッキム、ポール・

ハッチンソン（『クリスチャン・センチュリー』誌編輯次長）ラルフ・タウンセンド（『スクリブ
ナース・コメンテーター』誌編輯者）スタンフォード大学教授ペーソン・J・トリート博士

▲太平洋問題委員会声明 ニューヨーク（八・二五）太平洋問題委員会は二十五日正式※「#1字
不明」立と同時に要旨次の如き声明を發しその目的を明らかにした。

（一）日米關係はこの俟放置すれば戦争勃發の他なき危険な段階に到達している（一）この際日
米間の緊張感を融和し、平和的手段によつて両国間の諸問題の解決を計るよう即時有効な手
段を採ることは米国自身の利益に合致する（一）現下の極東諸問題は米国の權益に甚大な強
響を与えていることは事実であるが、しかもこれ等の諸問題はこのために日米両国が干戈を
交えねばならぬという性質のものではない。但し戦争回避のためにはこれらの諸問題の性質
を理解しその調整をはかるよう努力することが必要である（一）東洋における米国の地位を
強化するためには、徒に対日敵対態度を採るよりも友好的態度を採る方が遙かに有効である
（二）この観点からして委員会は日支紛争の解決を目的とする米国の事変調停の可能性を究明
せんとするものである。

第三章 「大東亜戦争の勃発」 第五節 「英米の対日宣戦布告」

英国は先に米国の参戦後一時間以内に対日宣戦を行うと約束していたが（註四一）、首相チャーチルの言によれば、かれは七日夜（日本時間八日）ローゼヴェルトと長距離電話で通話し、国際情勢について協議していた結果、対日宣戦布告はこの約束より遙かに早く行われた。その対日開戦を宣言した八日の午後（対日宣戦正式通牒は八日正午日本大使館宛手交）、かれはまた英国政府がタイ国に通知して、タイ国に対する如何なる攻撃も英国自身への攻撃と思惟する旨、また蒋介石に対しては英、支両国が今や共同の敵に對している旨を通告した旨を発表した（註四二）。

○ 1941.12 上旬号 第5巻34号9頁

対日宣戦布告の諸国

蘭印対日宣戦布告 サンフランシスコ〔一二・七〕……

ニカラグワ、コスタリカ対日宣戦 ブエノスアイレス〔一二・八〕……

カナダ対日宣戦 ストックホルム〔一二・八〕……

英対日宣戦布告 ストックホルム〔一二・八〕チャーチル首相は八日午後下院において英国の対

日宣戦布告を声明した。なお英政府は八日正午対日宣戦正式通牒を日本大使館宛手交した。

▲英首相下院で言明 ストックホルム〔一二・八〕ロンドン来電によればチャーチル首相は八日

午後下院で対日開戦を宣言した後英国の立場を左の如く述べた。

「英国は米国の参戦後一時間以内に対日宣戦を行なうと約束していたが、今回の対日宣戦布告はこの約束より遙かに早く行われた。余は七日夜ルーズベルト大統領と長距離電話で通話し、国際情勢の最近の発展につき協議した。また、英国政府はタイ国に対する如何なる攻撃も英国自身への攻撃と思惟する旨をタイ国政府に通告した。更に余は蒋介石に電報を送り、英支両国は今や共同の敵に対しての旨を協調した。米国の陸海軍は蘭印と緊密なる協力を維持している。」

米対日宣戦布告　ブエノスアイレス〔一二・八〕八日午後二時五〇分当地に達したワシントン電に依ればルーズベルト大統領は八日午後二時半（日本時間九日午前四時半）米国は日本と戦争状態に入ったと宣言した。

▲米議会宣戦布告に苦悶〔一二・九〕上海米国は八日午後対日宣戦布告を行なったがマニラより消息に依れば米上院はルーズベルト大統領の対日宣戦布告案を一七時間に亙って討議の末採決の結果、八〇対〇で可決し、下院も一三時間に亙る討議を経て三八八対一でこれを可決したと

濠洲対日宣戦布告　ブエノスアイレス〔一二・八〕……

キューバ対日宣戦布告 ブエノスアイレス〔一二・八〕……
ドミニカ対日宣戦 ブエノスアイレス〔一二・八〕……
ハイチ、ホンジュラス対日宣戦 リスボン〔一二・八〕……
コロンビア対日宣戦 マニラ〔一二・九〕……
メキシコ対日宣戦 リスボン〔一二・八〕……ブエノスアイレス〔一二・九〕メキシコ来電によればカマチヨ・メキシコ大統領は八日対日断行決定につき九日午後二時四〇分正式に対日宣戦布告を発表した。【宣戦布告は、清沢本文では翌年六月二日、他に五月二日という説もある】
サンドミンゴ対日宣戦 上海〔一二・九〕……
チリ対日宣戦 ブエノスアイレス〔一二・八〕……
オランダ対日宣戦 リスボン〔一二・九〕……

15

第三章「大東亜戦争の勃発」第六節「戦勝と単独不講和協定」

（註五一）……右の談話にある「タイ国へ進駐するように見せかけた」計画は十分に成功したようだ。

英国外相イーデン、及び米国國務長官ハルは八月六日、いずれも「泰国に対する干渉が日英国の最も重大なる事態を生起せしむることになろう」と声明し、イーデンは駐日大使クレイギーをして七月卅一日、右の旨を日本政府に通告した旨を下院で発表した。タイ及び蘭印への日本軍進駐とビルマ・ルートの攻撃が英、米両国の最後までのも最も大きな関心であった（『同盟旬報』一〇二頁参照）。

○1941.11 下旬号 第5巻36号 102頁

日米交渉

英国米国と緊密に連絡

ロンドン〔一一・二〇〕イーデン外相は二十日、アメリカン・ソサエティの午餐会席上、特にワシントン会議に言及し「右会談については全く米国政府を信頼し、一切参加を要求しない」旨を述べた。【…中略…】ロンドン外交界の消息筋によれば英国政府は全的にルーズベルト大統領の主張を支持していると解される。従つて会談が決裂し、太平洋の破局が遂に到来する場合は英国政府においても既に予見し、米国軍との周到な作戦協定、インド軍と極東軍との連絡前進基地としての香港守備隊の増強等の他に、戦艦プリンスオブウェールズ号が最近ケープタウンを経由極東に回航したとの情報さえ流布されている。帝国の動向に関する各種の情報にも、英国の海相は相当神経をとがらす程で、若し日本軍がタイ国及び蘭印に出る場合は勿論、昆明に進撃する場合でも、英米両国の空軍が何等かの形で重慶政権を援助するのは既

定の事実である。昆明作戦に対しては流石に英国陸軍省では軍事的に不可能と見ている様子であるが、蒋介石は英米両国政府に対し、特に滇緬公路防衛のため空軍に依る援助を要請した事実あり。イーデン外相が下院で「同公路に対する攻撃は重大な事態を誘致する」と述べたのは英米両国が開戦せずに軍事的に重慶を援助するとの合意であろう。然し最近では万一の場合も、日本は南はフィジー群島（英領南太平洋）西はボルネオまで進出して、熱帯資源が聯合國の手に入らぬよう通商路を押さえるだろうとの観測が行なわれている。然し英国政府は未だワシントン会議について匙を投げて居らず、チャーチル首相が今度の戦争の根本作戦として米ソ両国を味方に引込み、日本政府を敵に回さぬとの原則を堅持しているとか、英国外務省が会談の前途を静観しているという情報が過般官邸で述べたところは、嘗て重光大使との会談と用語途同じな位で、謀略と疑えば限りがないが、大体老宰相の真意であろうと観測されている。…略…

作成者：石井彰文

作成日：2013.5.28